

福井県埋蔵文化財調査報告 第182集

徳光大島遺跡

—一般県道徳光福井線道路改良工事に伴う調査1—

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

福井県埋蔵文化財調査報告 第182集

徳光大島遺跡

—一般県道徳光福井線道路改良工事に伴う調査1—

2023

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、一般県道徳光福井線道路改良工事に伴って、福井市徳光町地先において、平成30年度に発掘調査をしました徳光大島遺跡の発掘調査報告書です。

徳光大島遺跡は、福井平野南部に位置し、江端川右岸の自然堤防上に立地しています。主に弥生時代後期末に営まれた集落遺跡であり、多くの貴重な成果が得られました。遺構は、掘立柱建物や井戸が調査区中央の微高地、溝が調査区南端の旧河道北側でまとまって検出されました。調査区の中央が居住域、南側が集落の縁辺部にあたると考えられます。また、SD06では、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が一括して廃棄された状況で多量に出土しました。在地系の土器群が中心ですが、東海系の土器の他に翡翠製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉が共伴しており、地域間の交流等を推察できる良好な事例と考えられます。

今後、本書が各方面で広く活用され、埋蔵文化財に対するご理解を深める機会になるとともに、地域の歴史研究の進展に寄与できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大な御支援と御協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

令和5年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

所長 中川佳三

例　　言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが一般県道徳光福井線道路改良工事に伴い、平成30年度に実施した徳光大島遺跡（福井県福井市徳光町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は福井県福井土木事務所の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、田中勝之・佐々木芽衣が担当した。
- 3 発掘調査は、平成30年6月1日から平成30年10月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施した。出土遺物の整理は、令和2年度から令和4年度まで福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 4 本書の編集は青木隆佳があたり、田中・魚津知克・赤澤徳明が分担して執筆した。執筆の分担は以下の通りである。

田中	第1章、第2章第1節、第3章第1節・第2節
魚津	第2章第2節
赤澤	第3章第3節、第4章
- 5 遺構・遺物の図版作成は、田中・赤澤が行った。遺構の写真撮影は田中が、遺物の写真撮影は埋文センター職員が行い、写真図版作成は青木が行なった。
- 6 徳光大島遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 7 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真是、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 8 本書に掲載した遺構図ならび空中写真是、中央測量設計株式会社に作成を委託したものをお部改変したものである。
- 9 木製品の保存処理は、株式会社文化財サービスに委託した。
- 10 本書における水平レベルの表示は海拔高（m）を示し、方位は主に座標北を用いた。また、X・Y座標値は、国土方眼座標系第VI系に基づく。
- 11 本書における遺構の略記号は、以下の通りである。

SB	（掘立柱建物）、SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑）、SP（柱穴・小穴）
----	---------------------------------------
- 12 発掘調査には、地元の方々のご協力を得た。遺物整理は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員があたった。また、本書の作成にあたり、多くの方々からご助言・ご指導をいただいた。

凡　　例

表の胎土の項目は便宜上、次の7つに分類している。①径1mm以下の砂粒を少量含む、②径1mm以下の砂粒を多量含む、③径1mm以下と径1～2mmの砂粒を少量含む、④径1～2mmの砂粒を少量含む、⑤径1～2mmの砂粒を多量含む、⑥径2mm以上的小石を含む、⑦径1～2mmの砂粒と径2mm以上的小石を含む。また、蓋については、天井径を底径の欄に記載した。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺構と遺物	5
第1節 概要	5
第2節 遺構	6
第3節 遺物	12
第4章 まとめ	36

写真図版目次

図版第1 遺跡	(6) SD06 遺物出土状況⑥ (南より)
(1) 遺跡遠景 (東上空より)	(7) SD06 遺物出土状況⑦ (南より)
(2) 遺跡遠景 (北西上空より)	図版第5 遺構
図版第2 遺跡	(1) SE01 遺物出土状況 (北西より)
(1) 調査区南側全景 (北西より)	(2) SE01・SK02 (北東より)
(2) 調査区北側全景 (東より)	(3) SE02 遺物出土状況① (北西より)
図版第3 遺構	(4) SE02 遺物出土状況② (西より)
(1) 調査区中央全景 (北西より)	(5) SE02 遺物出土状況③ (西より)
(2) SB01・SD03 (北東より)	(6) SE02 下部半裁状況 (西より)
(3) SB02 (西より)	(7) SK03 遺物出土状況 (北より)
(4) SD04・05・06 (南東より)	(8) SK05 遺物出土状況 (東より)
(5) SD07・08 (南東より)	図版第6 遺物
図版第4 遺構	図版第7 遺物
(1) SD06 遺物出土状況① (南西より)	図版第8 遺物
(2) SD06 遺物出土状況② (南東より)	図版第9 遺物
(3) SD06 遺物出土状況③ (南東より)	図版第10 遺物
(4) SD06 遺物出土状況④ (南西より)	図版第11 遺物
(5) SD06 遺物出土状況⑤ (南より)	図版第12 遺物

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図	1	第14図 弥生土器・古式土師器実測図3	15
第2図 福井県地形区分図	2	第15図 弥生土器・古式土師器実測図4	16
第3図 周辺の遺跡	4	第16図 弥生土器・古式土師器実測図5	18
第4図 基本層序	5	第17図 弥生土器・古式土師器実側図6	19
第5図 遺構配置図	5	第18図 弥生土器・古式土師器実測図7	20
第6図 掘立柱建物実測図1	6	第19図 弥生土器・古式土師器実測図8	21
第7図 掘立柱建物実測図2	7	第20図 弥生土器・古式土師器実測図9	23
第8図 溝実測図1	8	第21図 弥生土器・古式土師器実測図10	24
第9図 SD06遺物出土状況図	9	第22図 弥生土器・古式土師器実測図11	26
第10図 溝実測図2	10	第23図 その他の時代の土器・陶磁器類実測図	32
第11図 土坑・井戸実測図	11	第24図 石器実測図	33
第12図 弥生土器・古式土師器実測図1	13	第25図 玉類・玉作り関連遺物実測図	34
第13図 弥生土器・古式土師器実測図2	14	第26図 木製品実測図	35

表 目 次

第1表 弥生土器・古式土師器観察表	27
第2表 その他の時代の土器・陶磁器観察表	32
第3表 石器・石製品・玉作り関係遺物観察表	34

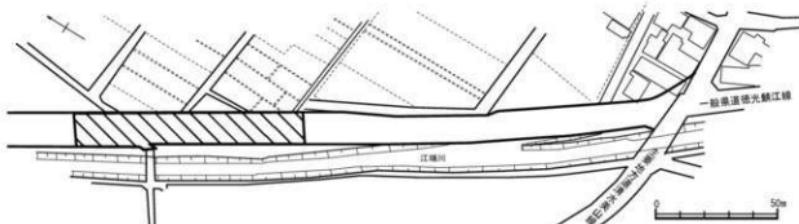
第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

一般県道徳光福井線においては、狭隘区間や屈曲箇所があり、冬期間には積雪による交通障害が発生する等、その走行性や定時性の確保が課題となっている。そのため、バイパス道路改良工事として、主要地方道清水美山線と同徳光鰐江線との交差点に位置する福井市徳光町を起点として北上し、北陸自動車道及び足羽川を経て一般国道158号に至る計画で事業が進められている。本遺跡に係る工事内容は、遺跡範囲の南西半において、江端川右岸に沿い北西へ向けて路線が伸びる計画となっている。

当該事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて、福井県土木部福井土木事務所、同県教育庁生涯学習・文化財課及び埋蔵文化財調査センター（以下「埋文センター」とする。）で協議を行い、埋文センターが平成7年2月16日、同29年11月27日に試掘調査を実施した。事業予定地内の適所に計8箇所の試掘坑を設定し、重機と人力で掘削を行った。調査の結果、1箇所で弥生時代から古墳時代の遺構と遺物を検出した。他の2箇所においては、遺構を検出した土層が堆積しており、自然堤防がひろがることを確認した。

試掘調査の結果を受けて再度協議を行い、事業予定地の内1,460m²については記録保存のため発掘調査が必要となった。



第1図 調査区位置図（縮尺1/2,000）

第2節 調査の経過

1 現地調査

現地調査は、6月1日から10月31日まで実施した。6月第3週目まではトレーンチ及び側溝を設定して地山まで掘削した。6月第4週目から8月第3週目までは、包含層を掘削して遺構面を精査した。調査区の旧地形は、微高地と南端の旧河道となり、南北へ向け緩く傾斜していることを確認した。また、調査区の中央部は圃場整備等による削平のため遺存状況があまり良好ではないものの、その南北両側に遺構が多くまとまる 것을確認した。8月第4週目から10月第2週目までは、遺構を掘削して遺物分布状況等の記録作業も行った。10月17日に航空測量及び10月18日に全景写真的撮影を行い、10月31までに補足の記録作業と器材の撤収をして調査は終了した。

2 遺物整理

令和2年度は洗浄・注記作業、同3年度は接合・復元・実測及び遺構図のトレイス作業、同4年度は遺物の写真撮影と原稿の執筆をして報告書を作成した。また、木製品1点は、同3年度に外部に委託して保存処理と樹種鑑定を行った。

第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

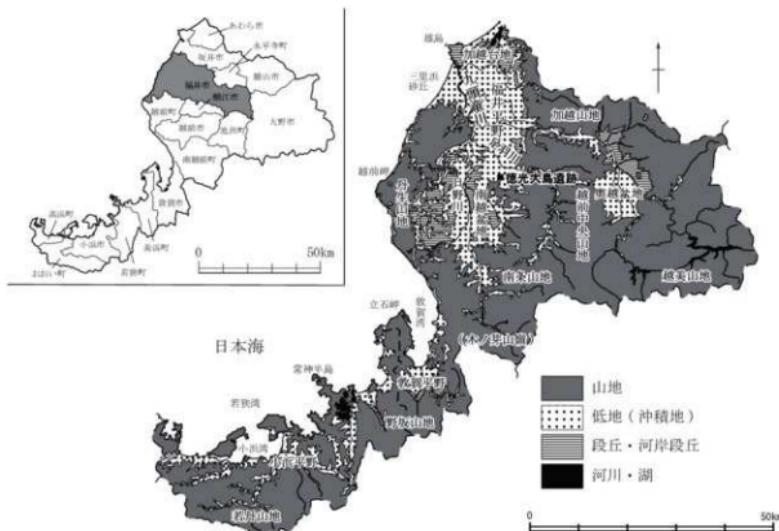
第1節 地理的環境（第2圖）

福井県は、敦賀市北東の木ノ芽山嶺を境として、行政的には嶺北と嶺南の各地方に区分されている。嶺北地方は、北を加越山地で石川県、東を越美山地で岐阜県と接し、西に丹生山地があり三方を囲まれ、中央に越前中央山地が南北にのびる。各山地に源をもつ九頭竜川、足羽川、日野川等の主要河川は北西へ向け集まり日本海に流出しており、福井平野はこれらの堆積作用により形成された沖積平野である。

福井平野は、南北長約40km及び東西幅約10~15kmと南北に長く、九頭竜川以北で竹田川や兵庫川等により形成された坂井平野、九頭竜川以南で日野川や足羽川等により形成された狭義の福井平野、文珠山や城山等による狭隘部以南を武生盆地に区分されている。狭義の福井平野は、日野川や足羽川等の諸河川が九頭竜川へ合流して北西の日本海へ流出する間、平野流入部の東縁一帯に小規模な複合扇状地帯、下流側に氾濫原や三角州等が形成されている。

狭義の福井平野の南部には、日野川の支流である浅水川や江端川等の中小河川が北または西方に向けて流れている。これらの中小河川は、東方から広がる扇状地や氾濫原により大きく蛇行する流路となり、自然堤防や後背湿地が形成されていた。

徳光大島遺跡は、狹義の福井平野南部に位置し、江幡川右岸の自然堤防等の微高地上に立地している。



第2図 福井県の地形区分図（縮尺 1/2,500,000）

第2節 歴史的環境（第3図）

縄文時代 上筋生田遺跡（第3図7、以下番号のみ）の発掘調査は、県内の沖積平野を広範囲に発掘した早い時期の調査例である。後期の包含層が検出され、多くの遺物が出土した。糞置遺跡（11）や下筋生田遺跡（5）の調査でも、晩期終末の土器が出土している。また、上六条遺跡（6）では、御物石器⁽¹¹⁾が表面採集されている。

弥生時代 周辺の弥生遺跡で最も著名なのが、糞置遺跡（11）である。数次にわたる発掘調査が実施され、多くの遺構や遺物が確認された。遺構では、土壙墓・環状土壙列群・土器棺といった多様な墓制を示す資料が注目される。遺物では、土器・石器だけでなく、木器や編物といった有機質遺物も多く出土した。上筋生田遺跡（7）でも、沖積平野に位置する弥生時代の生活面が調査され、多数の遺構・遺物が検出された。なかでも、方形周溝墓は県内初の平地部における確認事例となった。その後の発掘調査によって、今市遺跡（9）で5基、別所遺跡（4）でも6基の方形周溝墓が確認されている。今市遺跡（9）では中期の玉作りが確認された。さらに近年、上河北江原町遺跡（8）が発掘され、中期の方形周溝墓、後期の掘立柱建物等が検出された。一方、丘陵上の墓域としては、太田山墳墓群（1）が注目される。2号台状墓（報告書では2号墳）は、粘土で目貼りした特異な埋葬施設を持ち、多数の細形管玉副葬例も含まれる。共伴土器に恵まれなかったため時期決定は困難だが、後期中葉から後葉の築造だろうか。近隣の糞置遺跡との関連が大きな焦点となる。

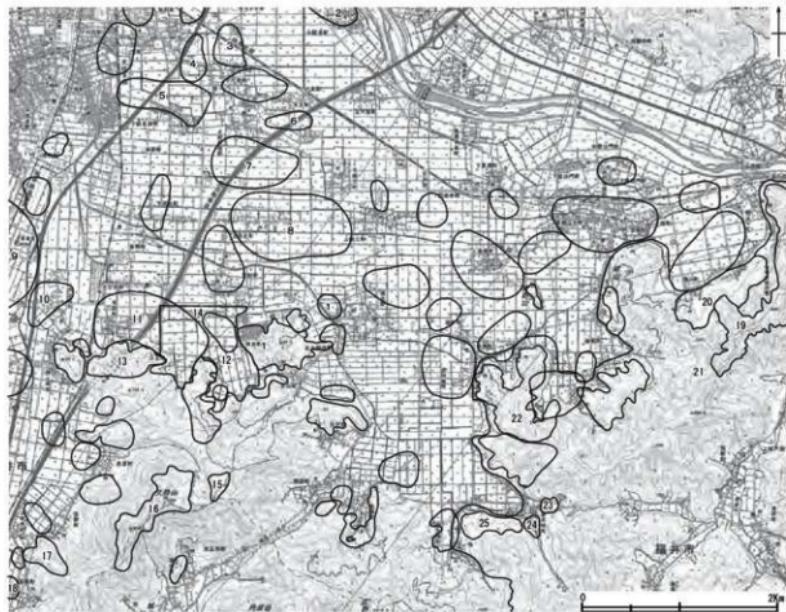
古墳時代 大土呂遺跡（10）では構や土坑が検出され、古墳時代初頭の土器が出土した。小稲津遺跡（2）では竪穴住居2棟、掘立柱建物2棟と方形周溝墓が7基検出され、古墳時代前期の土器が出土した。先述の糞置遺跡、上筋生田遺跡、上河北江原町遺跡においても集落が継続しており、前期の遺構から遺物が多数出土している。いずれも、農業生産の進展による中小首長層の基盤強化を傍証する資料である。

古墳時代の墓域としては、二上・半田古墳群（13）が近年調査された。1号墳では、刃闘孔を有する鉄剣の副葬が確認され、前期古墳としての様相が明らかになった。やや離れているが、前期から中期の前方後円墳を含む御井山古墳群（19）も東方に存在する。南方には太田山12号墳・13号墳が前方後円墳として存在し、文殊山上には、詳細不明ながら文殊山古墳（15）がある。中期から後期にかけての古墳調査例としては、太田山古墳群（1）、仙鷲古墳群（20）、西大味古墳群（25）が挙げられる。西大味2号墳における墳丘外埋葬は渡来系集団につながる可能性を示す資料が注目される。周辺は田治島古墳群（22）といった中規模群集墳が見られる。これら丘陵上以外にも平地である今市遺跡（9）では、削平された古墳が計8基検出されている。

今後の調査次第で、多くの新知見が見込まれる地域である。

古代 広く知られているように、奈良時代には、本遺跡南方に東大寺領糞置莊（14）が置かれた。この初期莊園については、現存する2種類の開田図をもとに、歴史地理学や文献史学の見地から多くの研究が蓄積されている。莊園の範囲に含まれる糞置遺跡の発掘調査では、奈良・平安時代の遺構や遺物が確認されているものの、莊家そのものの発見までには至っていない。調査で明らかとなった古代の遺跡としては、その他、上筋生田遺跡（7）、下六条遺跡（3）、下筋生田遺跡（5）、今市遺跡（9）が挙げられる。これらの遺跡では掘立柱建物等が検出され、墨書き土器等の遺物が出土している。

中世 本遺跡周辺は、一乘谷朝倉氏遺跡（21）の西側の外郭をなしたと考えられる。これを傍証するのが、文殊山城跡（16）、南山城跡（17）、丹羽岳城跡（18）といった山城跡、東大味館跡（23）、明智館跡（24）といった居館跡である。ただし、いずれも未調査で、詳細は明らかではない。一方、下筋生田遺跡（5）



第3図 周辺の遺跡（縮尺1/50,000）

では畠田地区の調査によって中世から近世にかけての遺構が検出された。陶磁器のみならず石製品・木製品も多数出土している。

註

本資料の採集地点は、過去に「天王遺跡」として報告されたが、名称が変更されている。上苅生田・下苅生田・上六条・下六条遺跡の調査履歴等については、(赤澤編 1994) を参照されたい。

参考文献

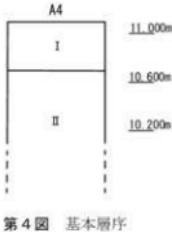
赤澤徳明 (編) 1994『下苅生田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第22集 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

第3章 遺構と遺物

第1節 概要

1 基本層序（第4図）

調査区の旧地形は微高地と南端の低地からなり、微高地は低地を除く大半の調査区内にひろがる。微高地は調査区のほぼ中央から西側と南北に向けて緩く傾斜し、調査区の中央と南北端で遺構面の比高差は約1mとなる。現況は水田と農道であり、以下、主にA4西壁で観察した土層堆積について記す。



第4図 基本層序

I層 暗褐色粘質土を主体とし、層厚約40cmを測る。耕作土と床土からなる現代の客土である。

II層 黄褐色粘質土を主体とする。

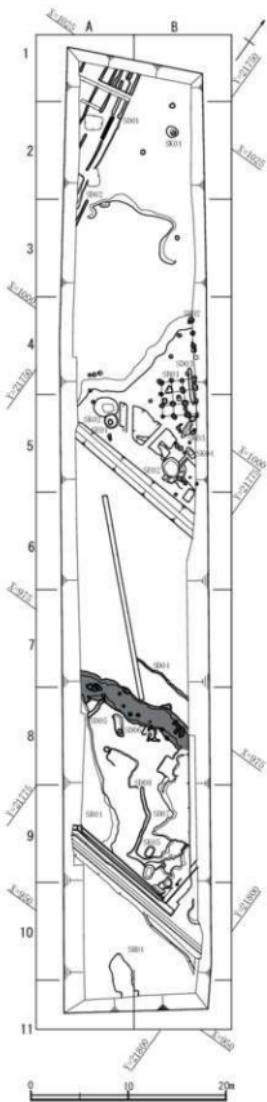
4列以北と7列以南では、微高地の傾斜にあわせて漸移的に灰色味を帯びた土色となり、粘性も強くなる。地山であり、II層上面で遺構を検出した。

遺物包含層や遺構面は、調査区中央付近で耕地整理等による削平や擾乱等を受けている。東西にのびる農業用排水路を境として、その南側は削平されて段状となっており、北側は排水路に並行して設置されていた農道部分に転圧や擾乱を受けている。その他の範囲は、比較的良好な遺存状況であった。

2 遺構・遺物（第5図）

遺構は、掘立柱建物2棟、溝8条、井戸2基、土坑5基、ピット多数の他、旧河道1条を検出した。掘立柱建物やピット、井戸は調査区中央の微高地、溝は旧河道の北側でまとまる。SB01は桁行3間×梁間3間の総柱建物である。SD06は調査区南側をほぼ東西にのび、弥生時代後期末の土器が一括して廃棄された状況で大量に出土した。在地系の土器群が主体だが、SD06の東端部では東海系のS字状口縁台付甕やくの字状口縁の甕がまとまって共伴している。また、SD06の中央西寄りで管玉製品3点と東端部で翡翠製の勾玉1点が出土した。SE01・02は共に素掘りであり、SE01では底面で甕の略完形が1個体分出土した。SE02は埋土上層から大量の土器、底部付近から籠状の木製品が出土している。

遺物は天箱40箱分出土し、内訳は土器・陶磁器が5割強、木製品が3割、石製品が1割強からなる。土器・陶磁器は中世の土師



第5図 遺構配置図（縮尺1/500）

質土器皿や越前焼等が中心であり、青磁、白磁、瀬戸美濃焼や瓦質土器等も少量含む。また、弥生時代後期末の土器もやや多く出土しており、他に縄文土器、土師器や須恵器が僅かに含まれる。木製品は漆器の楕や皿、箸、曲物、下駄等があり、石製品は砥石、粉挽臼、盤、行火、五輪塔、宝篋印塔等がある。金属製品では錢貨等が少量出土した。遺物は包含層から4割、遺構から6割が出土し、特にSD01・02・08やSE08・10・24、SK13等からまとまって出土している。

第2節 遺構

1 挖立柱建物（第6・7図）

SB01（第7図）B 4・5で調査区の中央北側に位置する。桁行3間×梁間3間の純柱建物で北西から南東方向に棟をもち、平面がほぼ正方形状を呈す。規模は桁行3.6mで梁間3.5m、柱間幅は桁行と梁間とも1.1～1.2mを測る。

SB02（第6図）B 4でSB01の北側に位置する。建物の大半は調査区外へひろがるため、建物の構造や規模は不明確である。柱穴列2間分を検出し、柱間幅は1.3mを測る。

2 溝（第8～10図）

SD01（第8図）A 1～3とB 1にかけて検出し、調査区北西端に位置する。平面は0.6～2.0m程の間隔で6、7条の溝が細長く直線的にほぼ南北にのびる。また、大半が調査区外へ続き、断面は浅く立ち上がる。

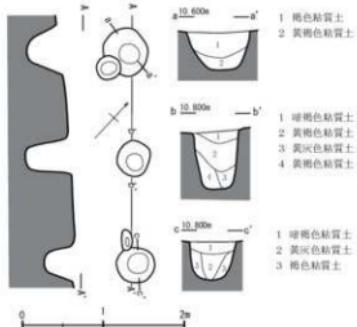
SD02（第8図）A 3で検出し、SD01の南東に位置する。平面は細長く直線的で、SD01と平行して南北にのび、調査区外へ続く。断面は浅く立ち上がる。

SD03（第8図）B 4・5にかけて検出し、SB01の北東部に位置する。平面はやや細長く直線的で、SB01の棟方向に平行して北西から南東にのびる。断面は平坦な底部をもち、やや急に立ち上がる。

SD04（第8図）B 7・8にかけて検出し、調査区の中央東側に位置する。平面は細長くほぼ直線的に東西にのびて調査区外へ続き、断面は浅く立ち上がる。

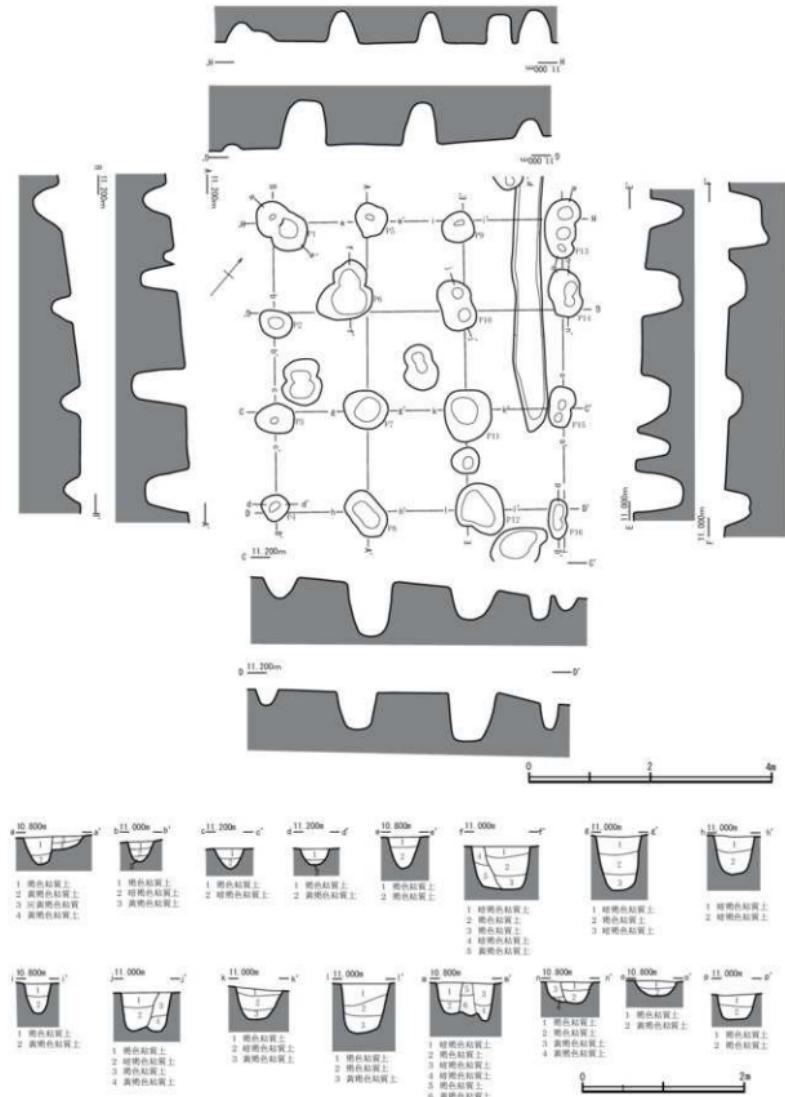
SD05（第8図）A 8で検出し、SD04の南西に位置する。平面はやや細長く緩やかに湾曲して南北に短くのびる。断面は浅く緩やかに立ち上がる。また、SD06と重複するが前後関係は不詳である。

SD06（第8・9図）A 7・8とB 7にかけて検出し、SD04の南側に位置する。平面はやや幅広く僅かに湾曲し、ほぼ東西にのびて調査区外へ続く。断面は底面に緩く凹凸があり、斜めに立ち上がる。SD07と重複するが前後関係は不詳である。SD06からは古墳時代初頭の土器が多量に出土している。また、石器、石製品や翡翠の勾玉1点も出土している。

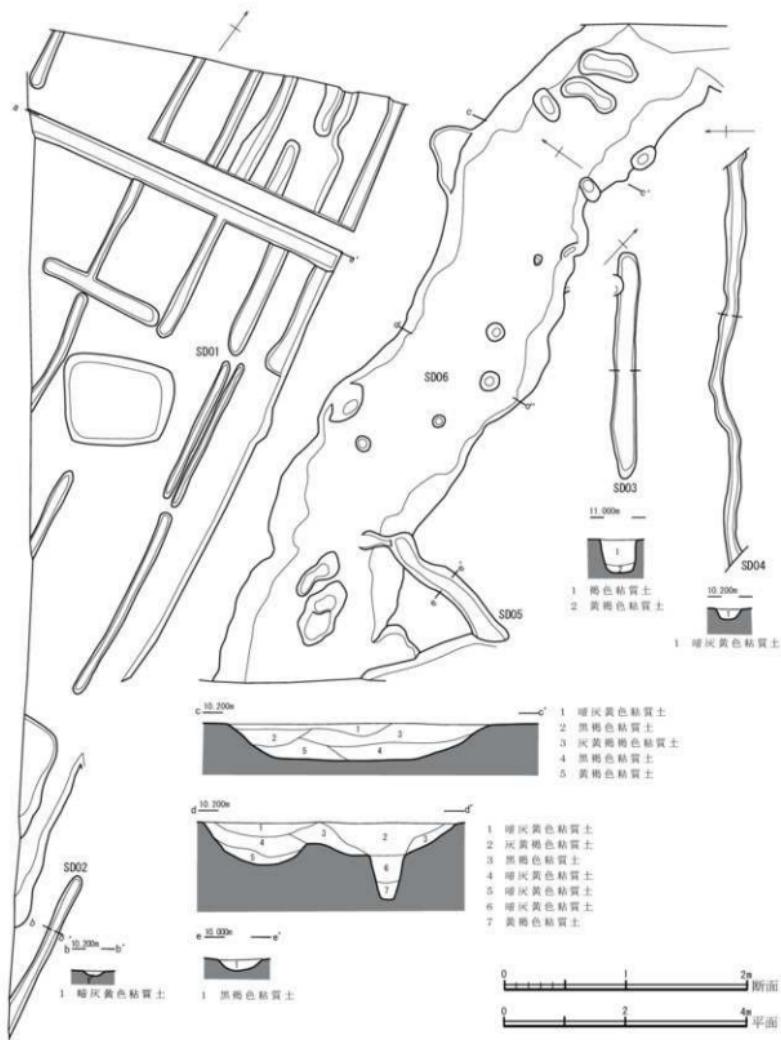


第6図 挖立柱建物実測図1（縮尺1/60）

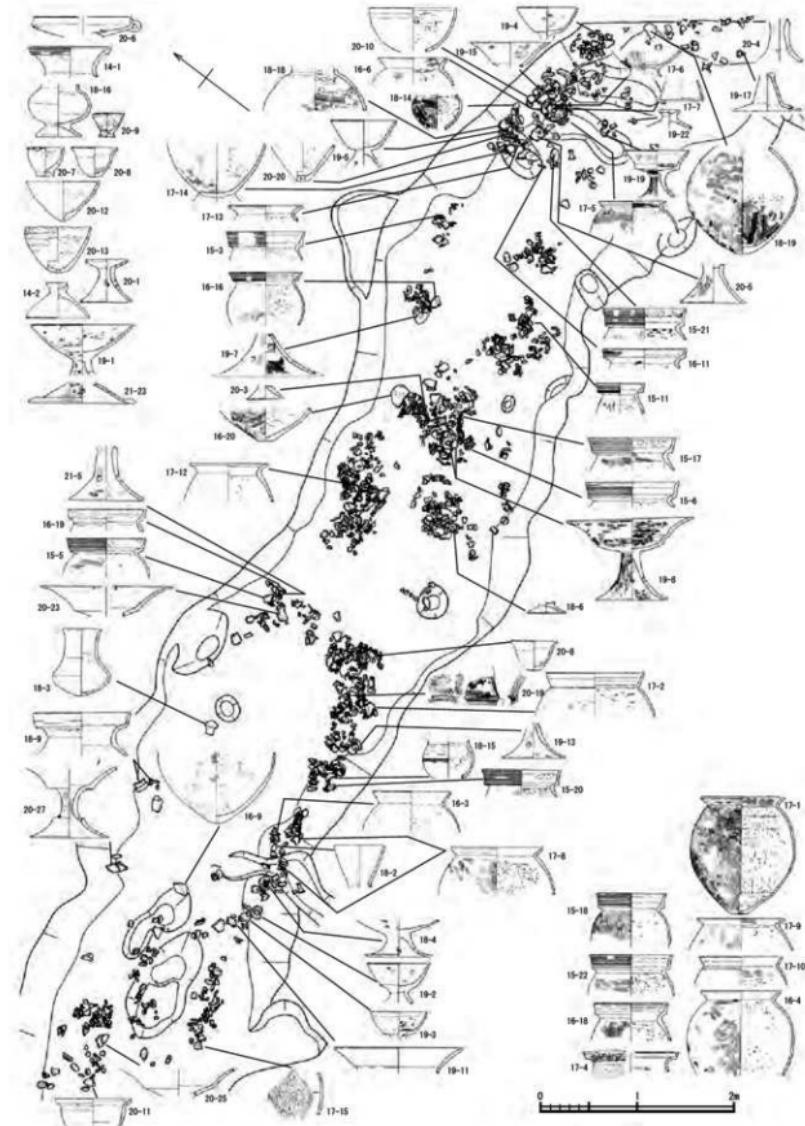
SD07（第10図）B 8・9にかけて検出し、SD06の南東に位置する。平面は幅広く不整な形状を呈し、緩く湾曲して北西から南東にのびる。北東半は調査区外へ続き、断面はやや深く斜めに立ち上がる。SD08と重複しており、SD07が埋没後に構築されている。SD07からは古墳時代初頭の土器と緑色凝灰岩の管玉1点が出土している。



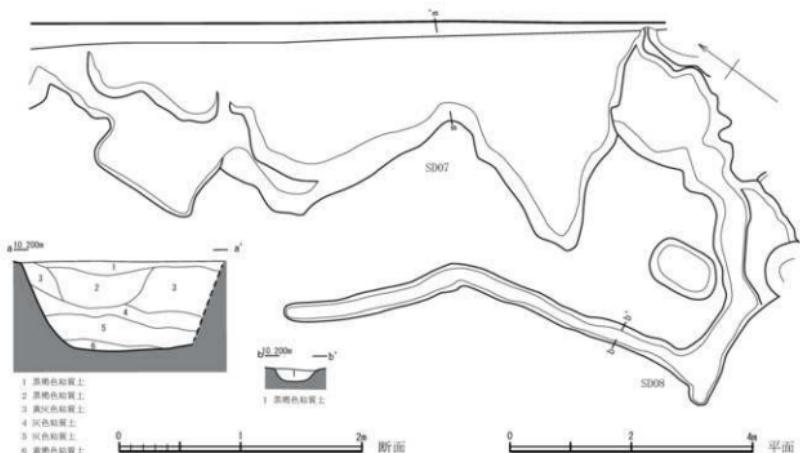
第7図 据立柱建物実測図2（縮尺1/60・1/80）



第8図 溝央測図 1 (縮尺 1/60・1/80)



第9図 SD06 遺物出土状況図（縮尺1/50）



第10図 溝実測図2（縮尺1/40・1/80）

SD08（第10図）A 5・9にかけて検出し、SD07の南西に位置する。平面は北西から細長くのびて途中で大きく屈曲し、緩く湾曲しつつ不整な弧状を呈して北東にのびる。断面は南東の肩部に段をもち、浅く立ち上がる。

3 井戸（第11図）

SE01（第11図）A 5でSB01の南西に位置し、SE01・02とも素掘りの井戸である。掘方は平面がやや小形の円形状を呈し、長軸1.4mを測る。断面はSE02と同様にやや幅広の筒状で上方へ斜めに緩く開く。また、上部に緩く段をもち、深さ1.1mを測る。埋土からは弥生時代後期の土器が出土している。

SE02（第11図）B 5でSB01の南東に位置し、掘方は平面がやや不整な円形状で長軸2.0mを測る。深さは1.5mを測る。埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

4 土坑（第11図）

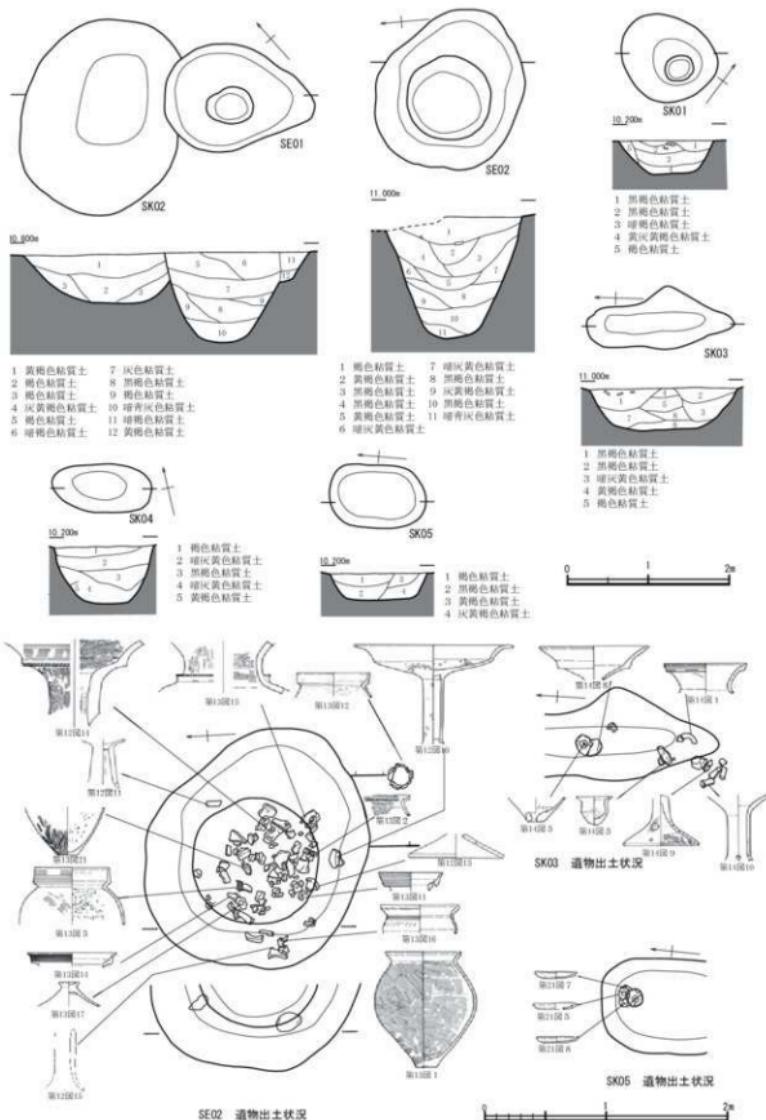
SK01（第11図）B 2でSD01の北東に位置する。平面は楕円形状を呈し、断面は西側の肩部がやや緩く立ち上がる。

SK02（第11図）A 5でSE01の北西に位置する。平面は大形の楕円形状を呈し、断面は西側の肩部が緩やかに立ち上がる。SE01と重複しており、SK02が埋没後に構築されている。

SK03（第11図）B 5でSB01の南東に位置する。平面は南北に長く不整な楕円形状を呈し、断面はやや緩く立ち上がる。2、3基のピットが重複しているとも考えられる。埋土から弥生時代後期の土器が出土している。

SK04（第11図）B 5でSK03の南東に位置し、平面は東西にやや長い楕円形状を呈す。断面はやや深く、南北の肩部が急に立ち上がる。

SK05（第11図）B 9でSD08の東側に位置する。平面は楕円の長方形形状を呈し、断面は底面が平坦でやや浅く立ち上がる。北側の底部立ち上がり付近で13世紀頃の土師質器4枚が重なって出土した。



第11図 土坑・井戸実測図 (縮尺1/40・1/60)

5 自然流路

SR01 A 8～11とB10・11にかけて検出し、SD08の南側に位置する。平面は幅広く緩やかに湾曲してほぼ東西にのび、西側の大半は調査区外へ続く。側溝を掘削した際に現代の廃棄物を多く含む埋土が2m以上堆積することを確認したため、完掘せず北東肩部を検出するに留めた。河川改修前の旧江端川流路にあたると考えられる。

第3節 遺物

今回の調査により出土した遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器が大半を占める。この両者の違いについては明確にすることはできないので、通例のごとく一括して扱う。SE01・02・03の他はSD06から多数出土し、214点が実測でき全体の95%を占める。この他にSK05から出土した土師質土器4点以外は、包含層から出土した中世の陶磁器6点と、古代の須恵器2点と土師器1点、縄文土器1点の僅か14点である。

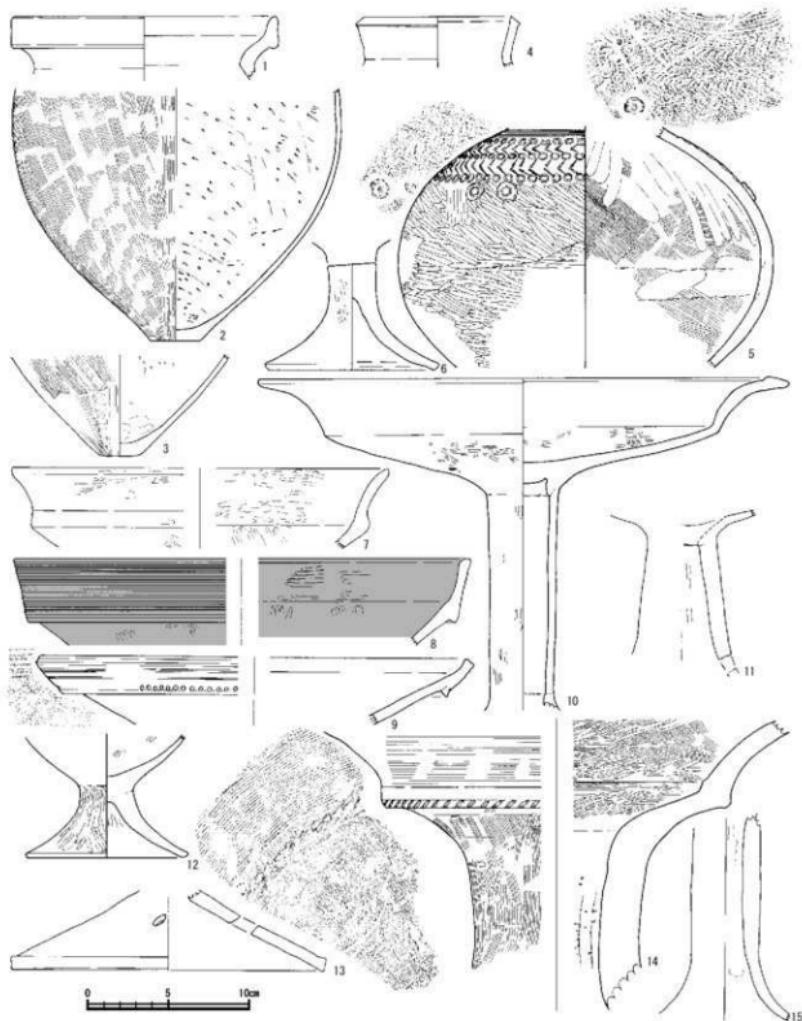
1 土器・土製品（第12～23図）

弥生土器・古式土師器

SE01からは甕口縁部、甕胴部下半2点、中型の壺口縁部と胴部の5点が図化できた。甕口縁部（第12図1）は無文の有段で、この時期の甕の口縁としては全体に器壁が厚いので壺の可能性もある。甕胴部下半の胴部器壁は2点（第12図2・3）とも薄く、底部は安定した平底であるが小ぶりで、典型的な月影系有段口縁甕の特徴である。2点とも下半部には煤が多く付着している。壺口縁部（第12図4）は短い頸部で内傾する面が口縁端部となる。壺胴部（第12図5）は底部と頸部より上の口縁部を欠く。頸部直下に5本の櫛描直線文の下に円形竹管文を列状に並べて3段巡らし、その間に綾杉状の篦刺突羽状文を加え、さらにこれらの文様帶の下に竹管を加えた円形浮文を2個一対で貼り付ける。

SE02からは甕が有段口縁6点、「く」の字2点、受口状口縁3点と底部1点の計12点、壺は有段口縁2点、突唇のある頸部で大型のもの1点、厚手の器壁から壺の底部と判断したもの3点、大型で端部を欠くが頸部から上の口縁部にかけての1点の計7点、鉢は受口と小型の手捏ねの2点、高环は坏部2点と脚部4点の計6点、器台は口縁部の2点を図化した。小型の壺か鉢の脚台と考えられるもの3点と、このほか蓋と把手部分が1点ずつで合計34点を図化した。

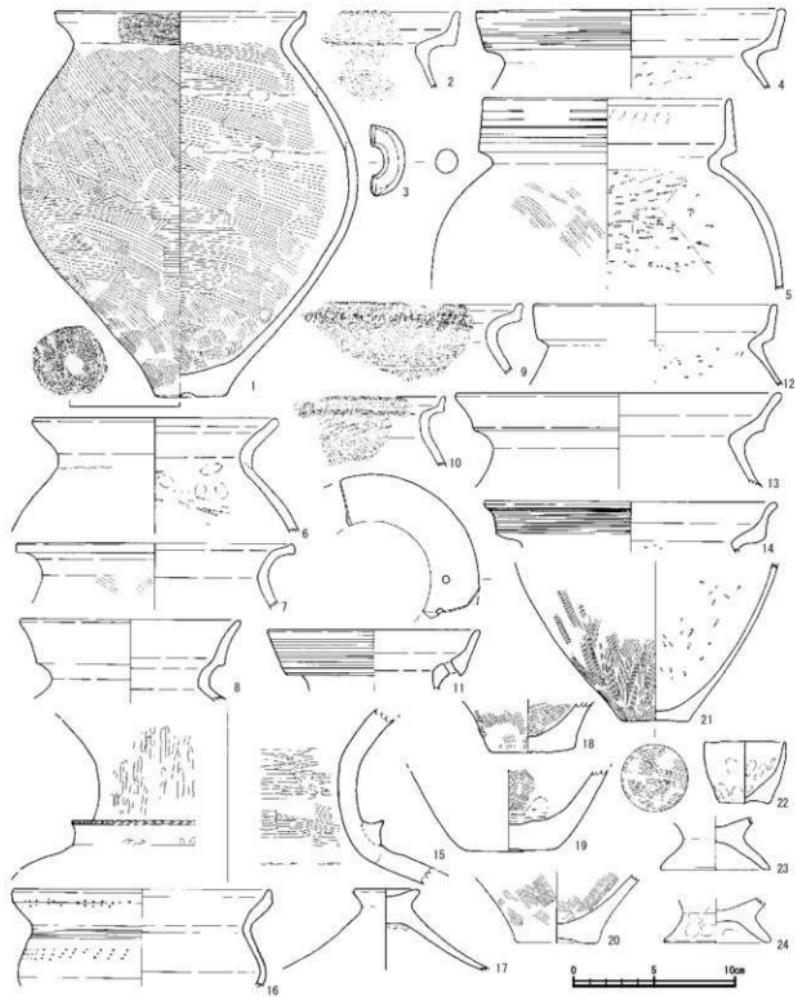
有段口縁甕は擬回線文があるもの4点と無文のもの2点である。擬回線を施文するものは、口縁がほぼ直立するもの（第13図2）は擬回線文がやや不明瞭で、やや外傾するもの（第13図4）とやや内傾するもの（第13図5）は擬回線が明瞭である。後者の立ち上がった口縁部内面には連続指頭圧痕がある。擬回線の施文が明瞭であるが、口縁部が外反するもの（第13図14）は口縁帶の立ち上がる部分が厚く、有段口縁としては典型ではない。無文の有段口縁甕は、口縁がほぼ直立するもの（第13図12）と、大きく外反し端部が丸くなるもの（第13図13）の2点である。「く」の字甕は口縁が直線に伸びて外傾するもの（第13図6）と、弧状に外反して頸部の屈曲が不明瞭なもの（第13図7）の2点である。いずれも器面の残りが悪い。ほぼ完形に復元できた受口状口縁甕（第13図1）はその特徴である受口の摘み出しが小さく、他の2点より受口としての形状が弱いが、底部が上げ底となっているため、受口状口縁甕の範疇として問題はない。残る2点は頸部直下に櫛描直線文とその下に列点文が微かに残るもの（第13図9）と、頸部直下に調整時のハケを止めた痕跡を残す無文のもの（第13図10）である。甕の底部（第13図21）と考えられ、やや大きめの底部にハケ調整するあまり類例のないものであるが、調整や器壁の厚みから



第12図 弥生土器・古式土師器実測図1（縮尺1/3）

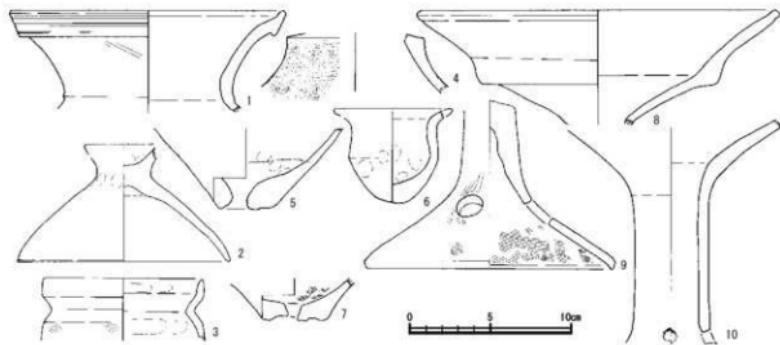
この時期の有段口縁甕のものであろう。

頸部に刺突列点を連続して加える突帯を貼り付ける大型の壺（第13図15）は、胎土色調や器壁の厚みも同じような同一個体と考えられる破片は多数あるが、胴部中央部のみが若干接合したのみで、図化できたのはこの頸部だけである。大型壺の頸部、もしくは器台脚部上半から受け部下半と考えられるもの



第13図 弥生土器・古式土師器実測図2（縮尺1/3）

(第12図14)は、この他に胎土色調が同じと考えられる破片は確認できていない。口縁端部を欠くものの口縁帯が大きく開く有段と考えられ、7～8本程度の櫛描直線文を数段巡らす。その下の口縁帯立ち上がりの突出部にヘラ刻列点文を巡らす。頸部の器壁が2cm強もあるにもかかわらず、推定される口径よりも細く長くなり本県では類例がないものである。頸部の下端に貼り付けの痕跡があることから、壺



第14図 弥生土器・古式土器実測図3（縮尺1/3）

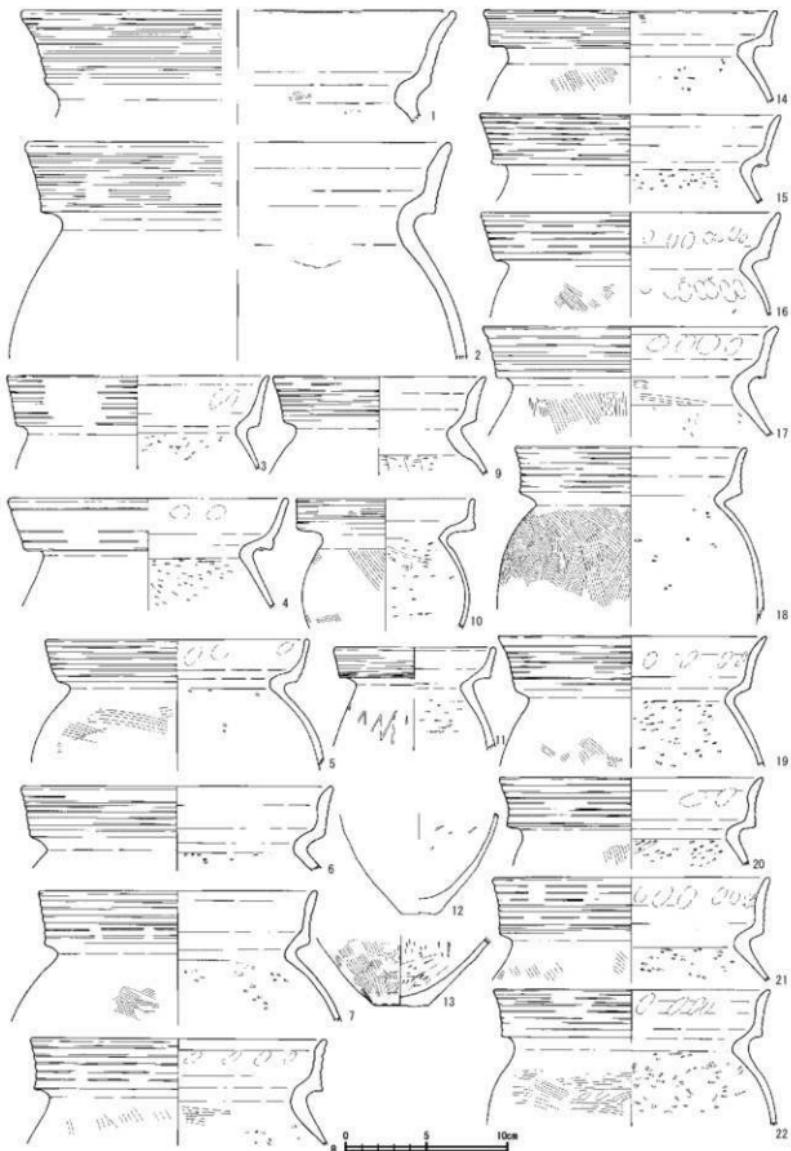
の頸部と考えられる。有段口縁は、擬回線文が施文され口縁の立ち上がりに蓋を留めるための焼成前穿孔の二孔一对が1カ所確認できるもの（第13図11）と、無文で外反する口縁（第13図8）である。壺の底部として3点（第13図18～20）図化したが、最も厚手の底部片（第13図19）は凸帯のある壺と類似する胎土である。

高坏は棒状の脚部に坏部口縁の内面は幅広に肥厚するもの（第12図10）と、坏部の口縁が立ち上がりで外反するもの（第12図7）の他に、棒状の脚部（第12図15）と全体に「ハ」の字に外反するもの（第12図11）があるが、いずれも下半の裾部を欠く。その裾部と考えれるもの（第12図13）は、孔の位置が一般的な高坏よりかなり下となる。器台は受け部の口縁部のみの破片で、13条の擬回線文が施文され内外面を赤彩するもの（第12図8）と、5・6条の擬回線文の下に円形の刺突列点を加えるもの（第12図9）の2点である。胸部を欠く脚台は3点（第12図12、第13図23・24）図化した。脚部の短いもの（第13図24）は指押さえで成形してナデ等を行わない。高坏の脚部（第12図6）であるが、明らかに坏部の接合部にあたる部分で終わっており、坏部の破損後に断面を調整して「蓋」に転用されたか、裾部に孔がないことから本来から「蓋」として製作されたかのいずれかであろう。

鉢は口縁部に刺突列点を加える近江の受口状口縁に近いもの（第13図16）と小型の手捏ねのもの（第13図22）である。前者は口縁部の立ち上がりに刺突列点を、胸部の頸部直下に櫛描直線と下に刺突列点を施文する。後者は上げ底の底部の中央を小さく突出させる。この他に鉢などの把手と考えられるもの（第13図3）がある。蓋（第13図17）は「ハ」の字に外反して開くこの時期に通有のものである。

SK03では図化できた壺はなかった。壺も有段の口縁部（第14図1）のみである。高坏は脚有段部にS字スタンプを施文するもの（第14図4）と、坏部の接合部から下の部分のもの（第14図9）で、後者は周辺の同時期のものと比較すると孔が大きく位置も低いのが特徴である。器台は有段の受け部（第14図8）と受け部の底から伸びる棒状の脚部が開く直前の孔の部分までのもの（第14図10）である。鉢は無文で有段の口縁部（第14図3）と、小型で端部を僅かに欠き丸底のもの（第14図6）、有孔鉢の底部と考えられるものが2点（第14図5・7）である。蓋は摘み部の端部を欠くが、内湾してすぼまるもの（第14図2）で壺に伴うと考えられる。

SD06から、壺は有段口縁が29点、「く」の字壺14点、受口状口縁1点、S字状口縁1点とその脚部2点、

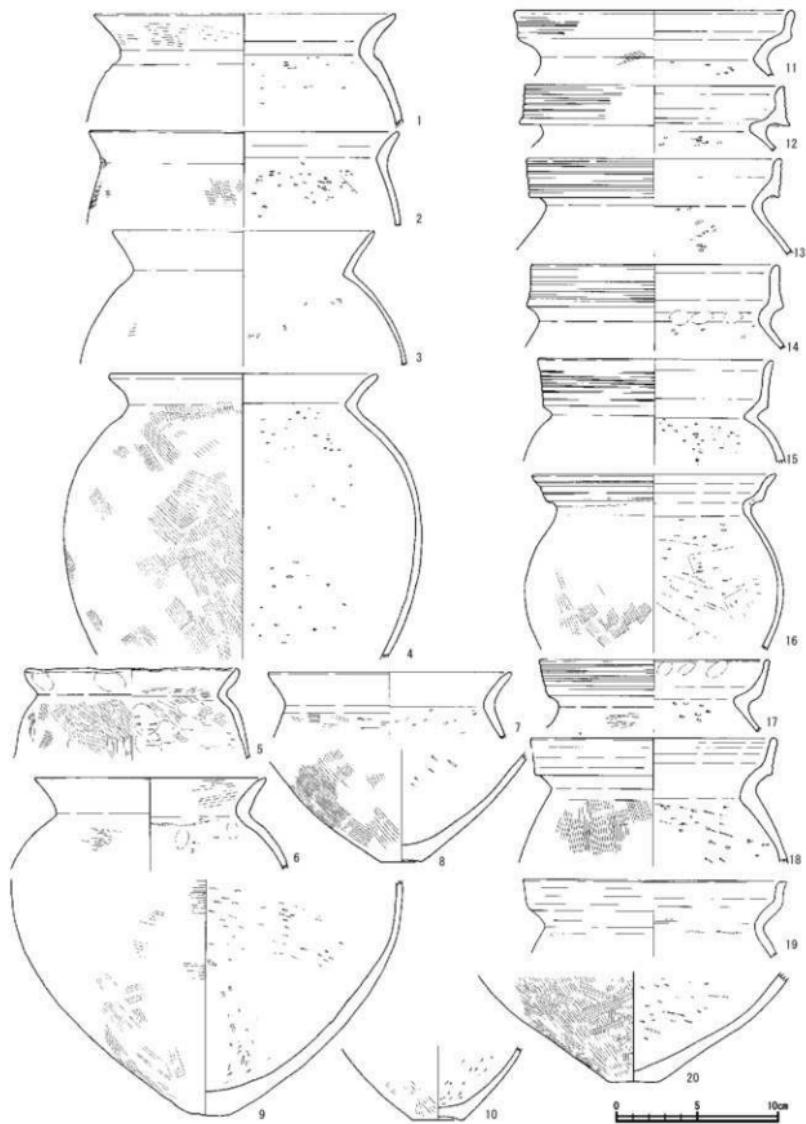


第15図 弥生土器・古式土器実測図4 (縮尺1/3)

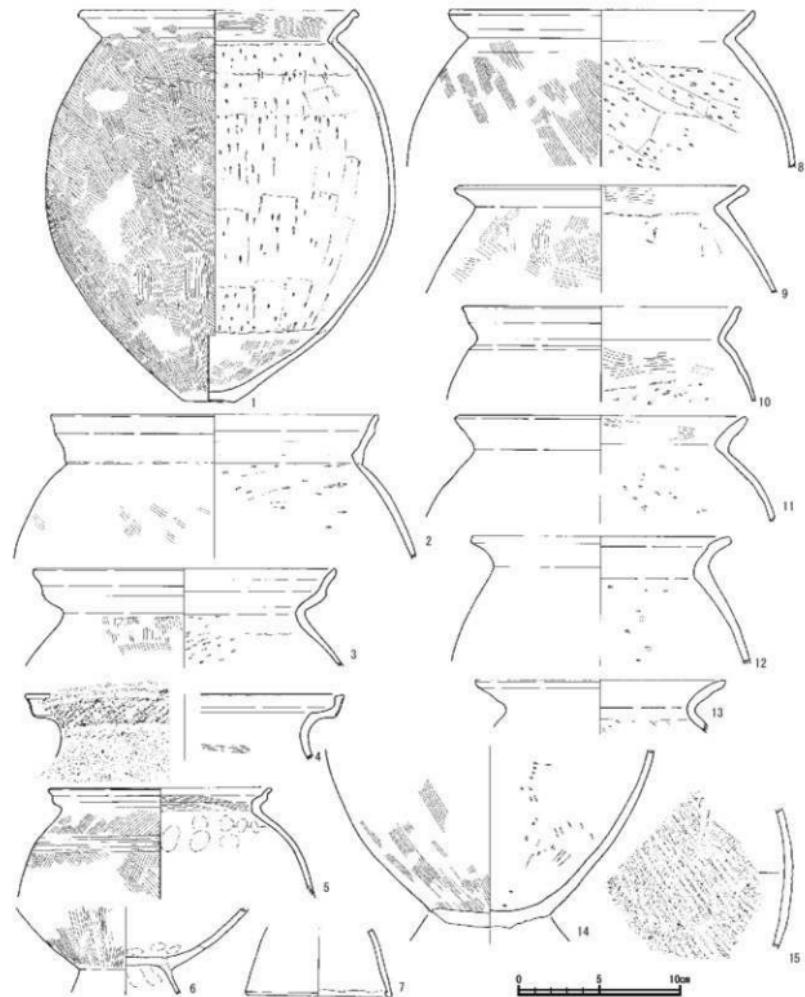
有段口縁か受口状口縁の退化系かと思われる2点に、底部などの下半部7点、さらにタタキ甕の胴部片1点の合計57点が図化できた。

有段口縁でもヨコナデ無文のものは29点のうち2点だけ（第16図18・19）で、残る27点はやや不鮮明なものもあるが擬回線文が施文されている。有文・無文ともに口径が25cmを超える大（第15図1・2）、15～18cm前後の中、10～13cmまでの小（第15図9～11）の3つに分かれる。中サイズの口径については、さらに15cm前後のもの（第16図11～17）と18cm前後のもの（第15図3～8、14～22）の2サイズにまとまる。前者は口縁がほぼ直立し端部を丸く收めるもので、SD06でもやや古手のものである。後者は口縁が外反または外傾し、端部が先細りするもので、いわゆる月影式甕の典型である。有段口縁が立ち上がりから外傾するなどより後出するもの（第16図16）は1点だけである。またその特徴である、口縁部内面の連続指頭圧痕は前者が6点で確認できず、後者は15点中10点（第15図3～5・8・16・17・19～22）と半数以上で確認できる。これら有段口縁の底部と考えられるものは、小型のタイプのもの（第15図12）と、出土数が多い中型のもの（第15図13、第16図8・9・20）の4点を図化した。北陸在来の甕には底部が上げ底となるものではなく、内面がケズリであるものは受口状口縁の底部が在地化したもの（第16図10）であろうか。「く」の字甕については口径や口縁の形状などで分類できるほど規格性は見られない。その特徴である頭部屈曲の「く」の字も、屈曲点に明らかな角となるもの（第16図3・4・7、第17図1・8～11）と、屈曲点が明確でなく丸みのあるもの（第16図1・2・5・6、第17図12・13）の2種類ある。口縁端部についても明確に面を形成するもの（第16図5、第17図1・9・11）、面の形成がやや甘いもの（第17図8・13）、端部先端を先細り、または丸くするもの（第16図1～4・6・7、第17図10・11）の大きさは3つに分類できる。また開く口縁部を単純に伸ばすのでは無く、中ほどを若干含ませるもの（第17図1・10）などもある。このように頭部の屈曲、口縁端部の形状、口縁部の伸び方など様々な要素が入り乱れる状況である。また「く」の字甕の口縁部は比較的丁寧にヨコナデを行うのがほとんどであるが、口縁端部にしっかりと面を形成するも、全くヨコナデしないで指押さえのままのもの（第16図5）もある。口縁の上端面を押さえて面を形成し、外面に刺突列点文も加える受口状口縁甕（第17図4）は1点だけである。S字状口縁（第17図5）は肩部と頭部内面のヨコハケは残るが、口縁部への刺突はない。口縁部に近い上半部分のみで、東海ではB類とされるものであろう。胎土の色調が異なるため同一個体とは言えないが、胴部下半と脚台の上までのもの（第17図6）に、端部の折り返しを残す脚下半（第17図7）もあり、S字甕にも複数個体ありそうである。いずれも胎土や色調からは搬入品とは考えられないが、非常に薄い器壁で本質地である濃尾平野の技法に近いと考えられる。この他に受口状口縁の退化、もしくは有段口縁との折衷があり、口縁の有段・屈曲が甘いか不明瞭なもの（第17図3）、外側のみが屈曲して有段に見えるもの（第17図2）など北陸と近江や東海との中間的なものがあるが、この2点とも頭部付近までのケズリが明瞭で、成形技法などはこの時期の北陸在来の甕の範疇であると言える。脚部が外れた台付甕の胴部下半（第17図14）は、S字状口縁もしくは受口状口縁の形状とは異なり、それらのハケ調整のハケ原体よりも粗いハケによるもので、どのようなタイプの甕に伴うかは不明である。タタキ甕（第17図15）の内面はナデで、胴部の小片のためその場所は特定できない。

壺は口縁部が残るもののが少ない。この時期に多くある有段口縁は頭部がやや長めの大型のもの（第18図9）と、頭部が短い中型のもの（第18図7）で、口縁部の擬回線文が摩滅のため残されていないか、もともとヨコナデの無文のものか判断できない。長胴の胴部から頭部が伸びたもの（第18図8）は口縁部で弱い有段となり、その立ち上がりに刺突列点を加える。ほぼ完形で出土したフラスコ型の壺（第18

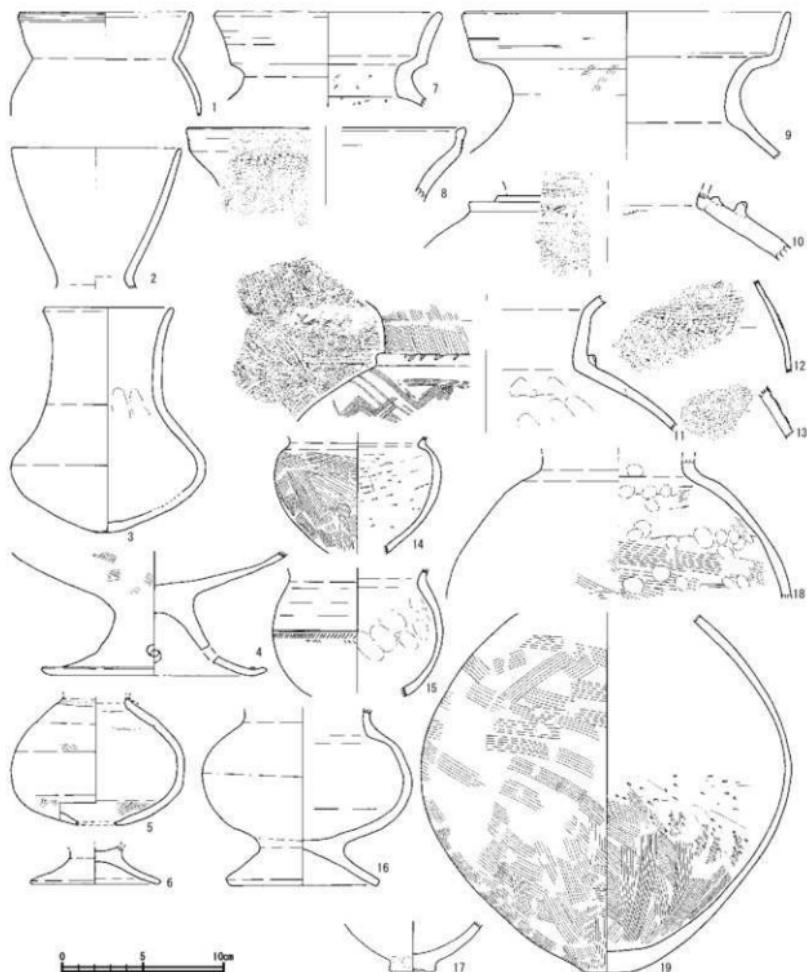


第16図 弥生土器・古式土師器実測図5（縮尺1/3）



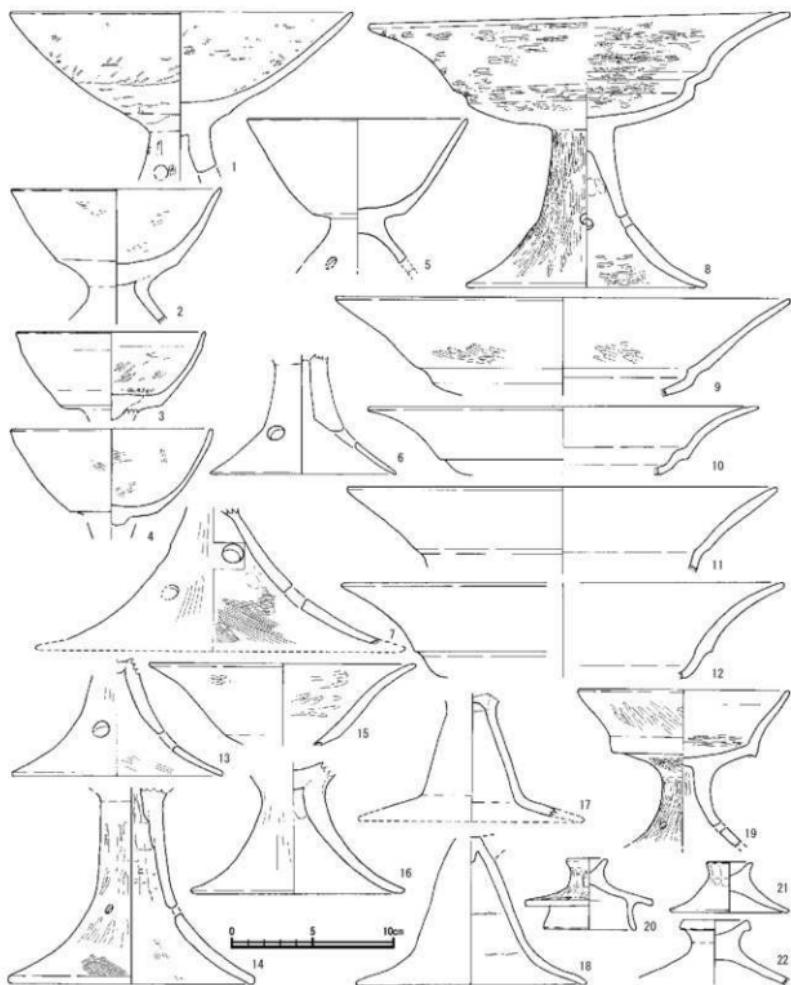
第17図 弥生土器・古式土師器実測図6（縮尺1/3）

図3)は胸部から頸部への屈曲が緩くその境が不明瞭である。同様な胸部から内湾する長い口縁部となるもの(第18図2)は、頭部の屈曲が明瞭であろう。「く」の字に屈曲する短い口縁部のもの(第18図1)は、口縁先端を内湾させ膨らみに櫛描直線文を巡らす。小型の壺には脚台が付くものが多く、丸みのある胸部(第18図16)で口縁が有段か立ち上がってそのまま端部となるかのいずれかと考えられる。頭部



第18図 弥生土器・古式土師器実測図 7 (縮尺 1/3)

に突帯の貼り付けの痕跡を残すもの（第18図5）や、胴部中位に刺突列点文を巡らせるもの（第18図15）などもその可能性がある。脚台が付くと考えられる胴部最大径が上に位置する台付壺と考えられるもの（第18図14）は、頭部で立ち上がり短い口縁部とも、周辺の出土例から小型のS字甕となる可能性もある。このような壺の脚台は小さく「ハ」の字に聞くもの（第18図6）が多いが、やや大きなもの（第18図4）は壺ではなく、鉢または高坏となる可能性が高い。脚台ではないが指押さえで厚手の底部とするも



第19図 弥生土器・古式土師器実測図8（縮尺1/3）

の（第18図17）もこのタイプの壺のものであろう。頸部近くの胴部上半に二条の突帯を貼り付けたもの（第18図10）と、頸部との屈曲部分に凸帯を貼り付けたもの（第18図11）があり、いずれも突帯には斜めにヘラ刺突を加える。櫛描直線文の下に櫛刺突列点を加えるもの（第18図12）は、この時期に通有のものである。櫛描直線文にS字スタンプを加えるもの（第18図13）は高杯や器台の可能性もあるが、三段とするものは装飾性の高い台付壺の可能性がある。中型の壺の胴部として2点（第18図18・19）を図化

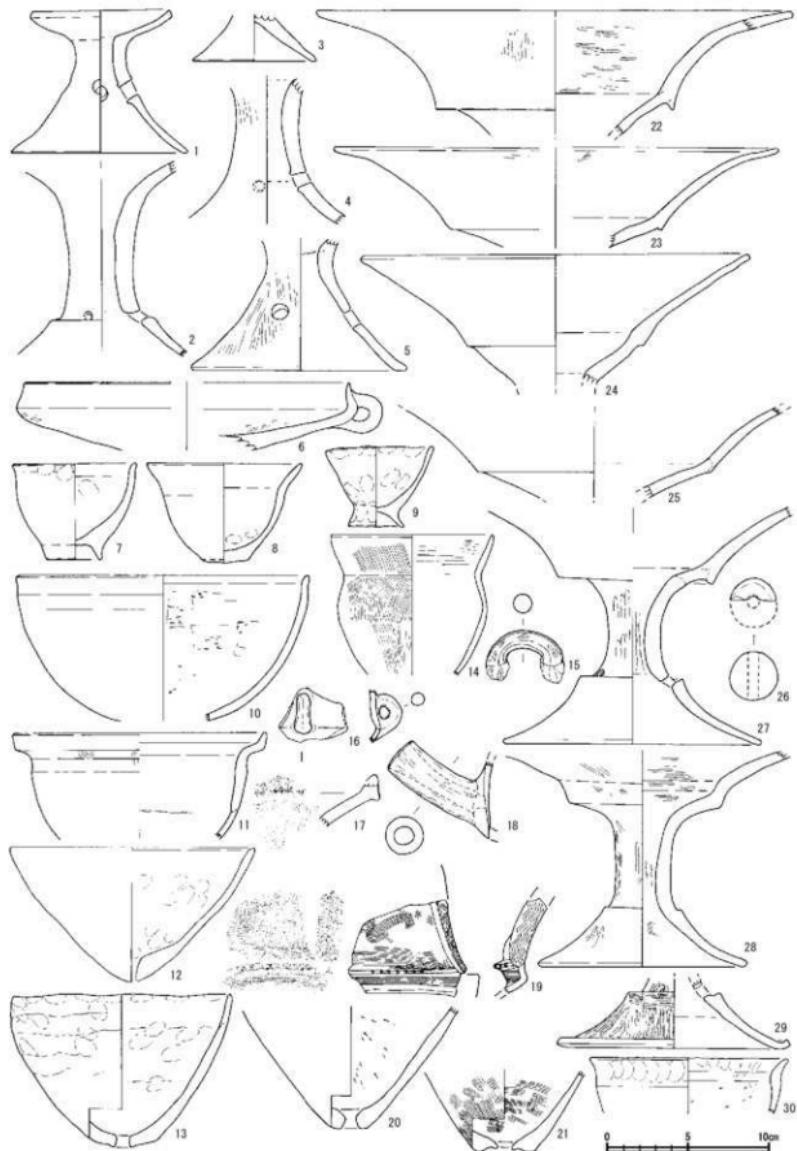
したが、いずれも内外面ともにハケ調整を残す。

高坏は有段の坏部のもの（第19図8）の1点が完形に図化できた。坏部は内外面ともにヨコミガキ、脚部の外面はタテミガキである。同じような有段のものは4点（第19図9～12）を図化したが、いずれも器面の残りが悪く調整が残らないものがほとんどである。坏部に明瞭な底部がなくやや内湾しながら大きく「ハ」の字に開くもの（第19図1）は、脚の下半を欠く。内外面ともヨコミガキと思われるが、残りがあまりよくなく明確には言えない。小型の高坏は東海の影響が考えられるものが多く、僅かに内湾しながら口縁となるもの（第19図2～4）と、直線の坏部だがその影響を受けたと思われるもの（第19図5）がある。口径が12～14cm前後である。いずれも脚の端部がないが、おそらく入れ違い2段に大きな孔の大きく開く脚部（第19図7）であろう。底で下へ突出させて有段の坏部となるもの（第19図19）も、口径が14cm未満と小さい。底が緩い有段の坏部のもの（第19図15）は、今回図化した高坏では16cmを超えるもので、これまで取り上げた高坏では例外の口径である。脚には据端部へ「ハ」の字に開くが、屈曲するものと、屈曲しないで緩く外反するもの（第19図13・14・16）がある。屈曲する脚にはその屈曲が弱いもの（第19図6・18）と、後出する屈曲が強く明瞭なもの（第19図17）がある。また据中央にある孔が確認できないものが2点（第19図16・18）ある。

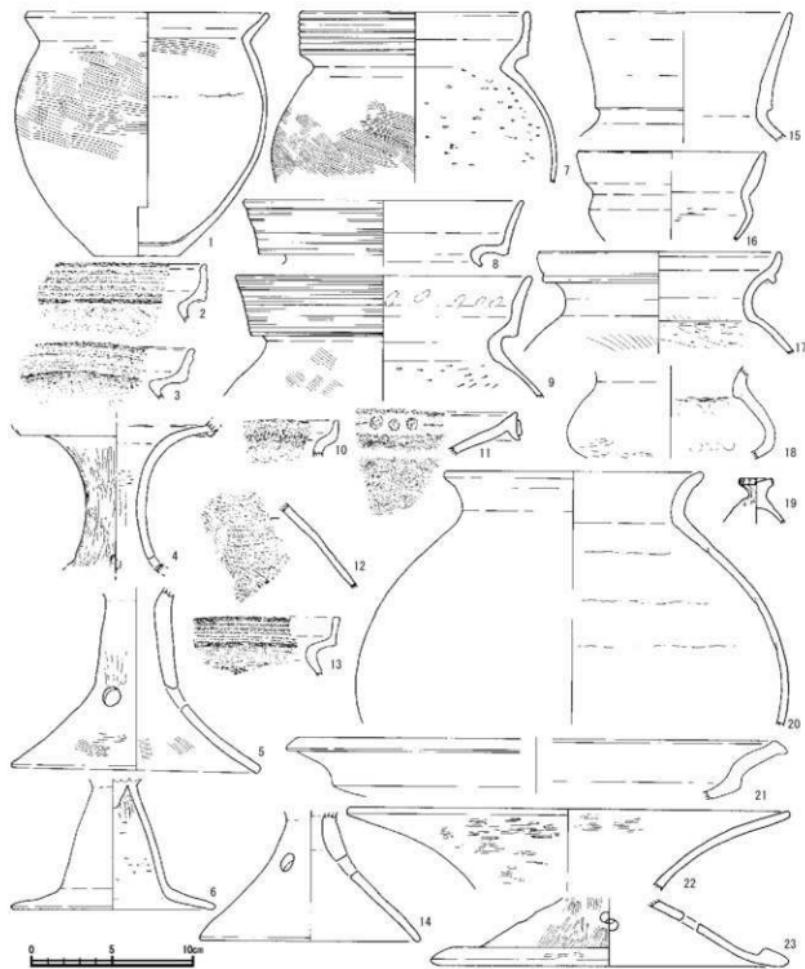
器台は完形として図化できたのは小型器台の1点（第20図1）で、この時期を代表するものは有段の坏部から口縁が大きく開くもの（第20図22～25）で、その脚部も有段となるもの（第20図2・27～29）である。脚部の有段から下の部分のもの（第20図29）以外は高坏同様に器壁の残りが悪い。明らかに器台の脚部と考えられるものには、有段とならないで「ハ」の字に開いてそのまま端部となるもの2点（第20図4・5）もある。器台の受け部口縁と思われる部分に、渦巻のスタンプ文があるもの（第20図17）があるが小片である。

鉢には有段の口縁となるもの（第20図11）以外は、胴部からそのまま口縁となるもので、底部は欠くがおそらく有孔鉢とならないもの（第20図10）と有孔鉢の2点（第20図12・13）である。全体がないので確定ではないが、底部の部分のみしかないもの2点（第20図20・21）も有孔鉢であろう。有孔鉢の調整は粗いものが多いが、内外面ともに指押さえで輪積痕を残すもの（第20図13）は珍しい。内面が本来は粗いケズリであるもの（第20図20）が多いが、内外面ともハケ調整とするもの（第20図21）は少ない。把手が付く鉢は浅い坏部で口径が大きいもの（第20図6）で脚台が付くものと考えられる。この他に小型の鉢に付くと思われる把手があり、半円形の把手が横となるもの（第20図15）と、縦となるもの（第20図16）がある。鉢には小型のものがあり、高台状に短い脚を付けるもの（第20図7）や、指押さえでやや伸ばすもの（第20図9）などの他に、平底で口縁部がやや外反するもの（第20図8）と、口縁部を厚手にして指押さえで外反するもの（第20図30）などバリエーションがある。口縁が「く」の字に開くもの（第20図14）は外面にタテハケを残す。

蓋には甕に伴うものと壺に伴うものの2種類あり、本来は前者の出土が多いが、ここでは甕に伴うと思われるものは1点（第19図22）のみで、後者には笠状のもの（第19図21）と、下に高台状に伸びるもの（第19図20）がある。山陰に類例の多い注口土器の筒状の注口部分（第20図18）は、本県では数例の出土しか確認していない。また手焙型土器の出土も限られているが、明らかにその下半分の胴（鉢部分）の口縁とそれに被さる覆いの側面（第20図19）がある。鉢の口縁に当たる部分は突出し連続してヘラ刻みを加え、その下に櫛描直線文を巡らす。覆い部の鉢と接合する下に、波状と直線の櫛描文を巡らす。覆いの開口部には外側へ張り出す突帯を貼り付け、その前面に櫛描波状文を加える。この他に土製品とし



第20図 弥生土器・古式土器実測図 9 (縮尺 1/3)



第21図 弥生土器・古式土師器実測図 10（縮尺 1/3）

て中央の穴の部分で半分に割れた土玉（第20図26）を図化した。

SD07（一部はSD06出土の破片と接合した）からは甕7点、壺5点、高坏2点、器台3点、高坏または器台の脚部2点、鉢1点、蓋1点の合計21点を図化した。甕は有段口縁が5点と主体で、1点以外は擬凹線文が施される。口縁帯がほぼ直立するもの（第21図2・7）と、やや伸びて外傾するもの（第21図8・9）である。擬凹線文が施されない無文としたもの（第21図3）も、強いヨコナデで擬凹線文

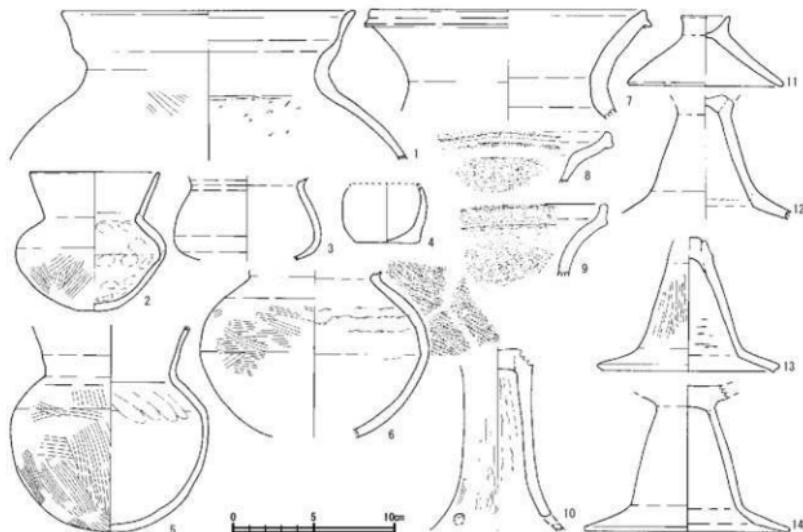
があるよう見えるものである。完形として図化できた「く」の字壺（第21図1）は大きな平底で、口縁端部に面を形成し、胴部外面と頸部内面にハケ調整を残す。大きな平底とは異なり一般的な壺の容量よりも明らかに二回り程は小さく、さらに内面の頸部以下は丁寧なナデ調整で、「く」の字壺としてはあまり類例を見ない。接合した胴部の1片がSD06からの出土である。口縁部の外面に櫛の刺突列点を加えるもの（第21図10）は受口状口縁壺である。壺で口縁部があるものは、幅広で無文の有段口縁（第21図15）、無文で有段が短く立ち上がりを下へ摘まみ出して突出させるもの（第21図17）、丸い大きな胴部から緩く外反する頸部から口縁が「く」に開くもの（第21図20）の3点である。口縁部ではなく胴部の上半だけの丸みのある壺（第21図18）は、外面が赤彩である。櫛描直線文と櫛描波状文を交互に繰り返す破片（第21図12）は中型の壺の胴部上半であろう。高坏は口縁端部が上下に肥厚するもの（第21図21）と、脚部が裾で屈曲するもの（第21図6）の2点である。器台の受け部にはラッパ状に大きく開くもの（第21図22）と、円形浮文が3個貼り付けられるもの（第21図11）はその口縁部分であろう。鉢は丸みのある胴部から口縁が有段となるもの（第21図16）であるが、有段部の立ち上がりが不明瞭である。器台の受け部の立ち上がりと脚部上半のもの（第21図4）はSD06出土の破片と接合した。脚部のみで高坏か器台か判断できないものが、脚全体が「ハ」の字に開くもの（第21図14）と、脚端部の外面が幅広く肥厚するもの（第21図23）の2点である。蓋はつまみ部（第21図9）が1点ある。SD06出土でも脚がラッパ状に開くもの（第21図5）は、SP103からの破片と接合した。また直立て立ち上がる口縁部に擬凹線文を施す小片（第21図13）も、SP103からの出土である。

包含層出土の壺は有段口縁でも外面の有段の屈曲が不明瞭となるもの（第22図1）しか図化できなかつた。壺は端部をやや拡張する口縁部に2条の沈線を加えるもの（第22図8）と、拡張した平坦面がやや僅むが無文のもの（第22図7）に、小さく立ち上がる口縁部で有段となるが無文のもの（第22図9）などがある。さらに丸底の壺には類例の多い小型のもの（第22図2）と、明らかに大きめの中型のもの（第22図5・6）があり、前者は最終的にミガキ調整であったのが、器壁の表面が剥落して一次調整のハケが見えるが、後者はハケ調整のままである。小型の壺には下膨れの胴部であるが有段口縁となると考えられるもの（第22図3）もある。また小型品には平底で小さく内傾した口縁となるもの（第22図4）は鉢に分類される。高坏の坏部や器台は図化できなかつたが、高坏の脚部はやや長めの脚上半から「ハ」の字に裾が広がるもの（第22図10）と、裾の端部近くで屈曲して開くもの（第22図12～14）の4点を図化した。この他に口径の小さい蓋（第22図11）があり、壺に伴うものと考えられる。

弥生土器・古式土師器の時期とその概要

今回の調査で出土した土器のほとんどが弥生時代後期から古墳時代初頭の古式土師器で、その違いについては明確にはしえないと最初に述べた。しかし遺構別に検討してみるとSE01・02とSK03は弥生時代後期の法仏式から、月影式でも前半の時期に収まると考えられる。SD06・07はそれらの時期も含むが、明らかに古墳時代初頭の白江式に相当する土器が存在する。

SE01では時期をより明確に示せる壺が図化できなかつたが、やや大きめの底部は平底でも小さくて自立しない月影式でも後半から終末ではない。短頸壺の口縁部や、羽状刺突文に円形浮文を貼り付ける丁寧なミガキ調整の壺胴部などは法仏式と考えられる。SE02の壺は有段口縁が伸びるものと直立するもの（第13図2・4・5・12）などや、外反しても端部を丸くするもの（第13図13）で、明らかに口縁端部が先細りしたり、口縁部中ほどで小さく外反したりするような月影式の有段口縁壺でも後半の特徴となるものは見られない。立ち上がりが厚く時期が下るとは特定できないものの（第13図14）などがあるが、こ



第22図 弥生土器・古式土器実測図 11（縮尺 1/3）

のような形態の口縁は甕ではなく壺、もしくは鉢になる可能性もある。壺でも蓋を伴うであろう有段部に2つの孔をあけるもの（第13図11）は、装飾性が高いものは胸部にS字のスタンプを巡らせるようなものがあるタイプである。高坏では坏口縁部内面を肥厚するもの（第12図10）、器台では赤彩されるものの（第12図8）や、擬回線文のある有段の口縁帯の下端に刺突列点を加えるもの（第12図9）などがある。小さく摘み上げた口縁帯に刺突列点を加える近江の影響を受けたと考えられる鉢（第13図16）など、いずれも月影式最終末の時期にまで下げて考えられるものは見当たらない。SK03も同様で有段口縁の壺（第14図1）や、小片ではあるがS字のスタンプを施文する高坏・器台の脚有段部（第14図4）などは法式の範疇であろう。「く」の字甕については頭部の屈曲が緩く丸いもの2点（第13図6・7）で、「く」の字甕としての呼称が妥当であるように思えない。

SD06ではSE01やSE02から出土している有段口縁と同じように口縁部がほぼ直立するもの（第16図11～14）などもあるが、SE01やSE02では見ることのできなかった明らかに口縁端部が先細りしたり、口縁部中ほどで小さく外反したりするような月影式後半に典型的なもの（第15図1～4・6～9・15～22）が多くなる。「く」の字はSE01・SE02と同じように頭部の屈曲が丸いもの（第17図12・13）もあるが、その多くは頭部の屈曲が明瞭なもの（第16図3・4、第17図1・8～11）が主体で、屈曲そのものが前者ほど明瞭ではないが、頭部の断面が明らかに「く」の字と呼べるもの（第16図1・2・5～7）である。さらに口縁端部の面取りが明らかに「く」の字と呼べるもの（第17図1・8～10）と先細りさせるもの（第16図1～7）で、口縁端部への意識があるものがほとんどである。また伸びる口縁部の中ほどをやや膨らませるもの（第16図1・10）も、口縁内面が肥厚する布留式の甕につながる、新しい時期の「く」の字甕の特徴と考えられる。高坏・器台には明らかに古い時期と考えられるものは見当たらない。高坏には塊状の坏底部から有段に

立ち上がる口縁が大きく外反するもの（第19図8～12）や、浅い塊状の坏部（第19図1）、または小型の坏部（第19図2～5）など東海の影響がうかがえるものがこの時期を示す典型である。高坏の脚部には裾の中ほどで屈曲するより新しいもの（第19図17・18）まである。器台については有段の脚部に、受け部がラッパ状に大きく開くもの（第20図22～25・27・28）に、さらに小型器台（第20図1）も完形として図化できた。SD07でもSD06と同じく、法仏式から月影式前半土器として甕（第21図2・3・7・13）、壺（第21図17）、高坏（第21図21・23）、器台（第21図11）を、月影式でも後半から終末以降の土器として甕（第21図8・9）、高坏（第21図6）、器台（第21図22）などを示すことができる。

第1表 弥生土器・古式土師器觀察表

第3節 遺物

第3節 遺物

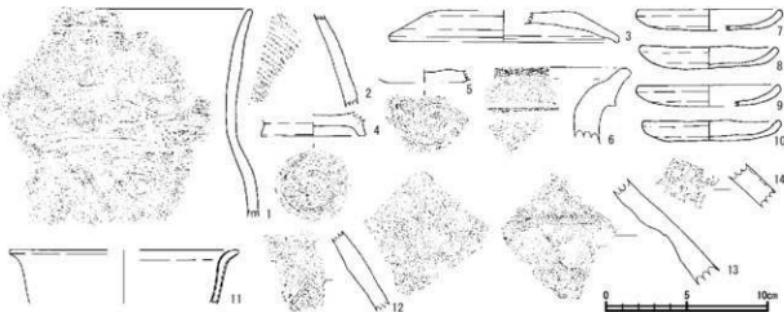
そのほかの時代の土器・陶磁器類

これまで述べてきた弥生土器とこれに続く古式土師器以外に計14点を図化した。繩文土器1点、古代の須恵器2点と土師器1点、中世の陶磁器6点、土師質土器4点である。

繩文土器はSK10からの出土で、頸部で小さくくびれて口縁部が若干外反し、口縁端部に刻目が確認できない深鉢（第23図1）である。外面調整は屈曲した頸部から上の口縁帯をヨコミガキ、下をタテまたはナナメのミガキである。時期は晩期後半であろう。

古代の土器は須恵器の壺蓋(第23図3)と、外面にタタキ痕を残し内面をナデ仕上げる甕類などの胴部片(第23図2)、土師器塊の高台部分(第23図4)の3点である。

中世の土師質土器はSK05からまとめて出土した4点(第23図7~10)があり、諫訪間興行寺遺跡報告のII B類でもbに分類される13世紀代のものと判断した。この他に越前焼甕の口縁部(第23図6)、内面に接合のさいの指押さえ痕のある胴部片(第23図13)、菱形の格子目と考えられる押印(第23図12)と、方形の格子目の押印(第23図14)の4点である。瀬戸の灰釉皿の底部も1点(第23図5)ある。輸入陶器はあまり良質な胎土ではないが、青磁の碗の口縁部(第23図11)がある。



第23図 その他の時代の土器・陶磁器類実測図（縮尺 1/3）

第2表 その他の時代の土器・陶磁器観察表

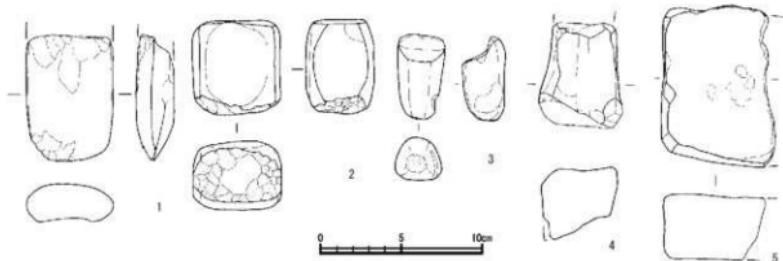
固有番号	部	種	学名	分布地	形			種	色調	輪	測定法・文獻	備考	
					上位	頂高	底延						
001002	頭部	側	阿波	山	山古曽	-	-	鳥	内:暗褐色 外:淡褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ		
001003	頭部	蓋	阿波	AII	山古曽	14.9	0.96	-	鳥	内:上-外:和麻(11.0)の色 外:白	白	内:アマメナリ 外:シロハラ	
001004	上部脚	端	高台	山	山古曽	0.4	4.2	鳥	内:白 外:内:白 外:白	白	内:白 外:内:白 外:白	内:アマメナリ 外:シロハラ	
001005	頭部	側	阿波	AII	山古曾	-	0.86	0.86	鳥	内:暗褐色 外:暗褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ	
001006	頭部	側	阿波	AII	山古曾	-	0.75	0.75	鳥	内:暗褐色 外:暗褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ	口径2.6以上
001007	上部脚	端	山古曾	山	山古曾	0.49	3.9	0.25	鳥	内:白 外:内:暗褐色	白	内:白 外:アマメナリ	
001008	上部脚	端	山古曾	山	山古曾	6.2	1.4	7.0	鳥	内:白 外:内:暗褐色	白	内:白 外:アマメナリ	
001009	上部脚	端	山古曾	山	山古曾	0.49	3.9	0.25	鳥	内:白 外:内:暗褐色	白	内:白 外:アマメナリ	
001010	上部脚	端	山古曾	山	山古曾	6.3	1.3	7.0	鳥	内:白 外:内:暗褐色	白	内:白 外:アマメナリ	
001011	頭部	蓋	阿波	AII	山古曾	0.11	0.35	-	鳥	内:淡褐色 外:淡褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ	
001012	頭部	側	阿波	AII	山古曾	-	-	-	鳥	内:淡褐色 外:淡褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ	
001013	頭部	側	阿波	AII	山古曾	-	-	-	鳥	内:淡褐色 外:淡褐色	白	内:テリナリ 外:アマメナリ	
001014	頭部	側	阿波	AII	山古曾	-	-	-	鳥	内:暗褐色 外:暗褐色	白	内:アマメナリ 外:アマメナリ	鷹子目

2 石器・石製品（第24図）

石器はいずれもSD06からの出土で、磨製石斧と敲石の3点、石製品としては砥石2点を図化した。磨製石斧（第24図1）は基部を欠き、全体の刃部側の1/3程度が残ったものと考えられる。片面の表面と刃部も一部を欠く。緻密な石質で片岩系の石材と考えられ、表面は薄い緑色を呈する。重さは411.5gを測る。

敲石はほぼ方形で長さ、幅とも7cmを超える長方体の大きめのもの（第24図2）と、断面がお握りのような丸みのある三角形を呈するもの（第24図3）の2点である。前者は砂岩系の石材で616.0g、後者は安山岩質の石材と考えられ107.5gを測る。

砥石は6面の長方体の2点である。長さが13.3cmの大きなもの（第24図5）は、6面のうち大きな2面の片側は中央が内湾するように使用され、もう1面は使用されているものそこまでの頻度ではない。その長い側面は両面とも未使用である。小さな側面の1面のみが角度を変えて2方面が使用されているが、その反対の面は未使用である。重さは413.0gを測る。長さが8.65cmのやや小さいもの（第24図4）は不整形な6面で、大きめの4面のうち3面をやや内湾する。残る3面は自然面、または割れたままの状態を残す。重さは1167.0gを測る。ともに石材は砂岩である。



第24図 石器実測図（縮尺1/3）

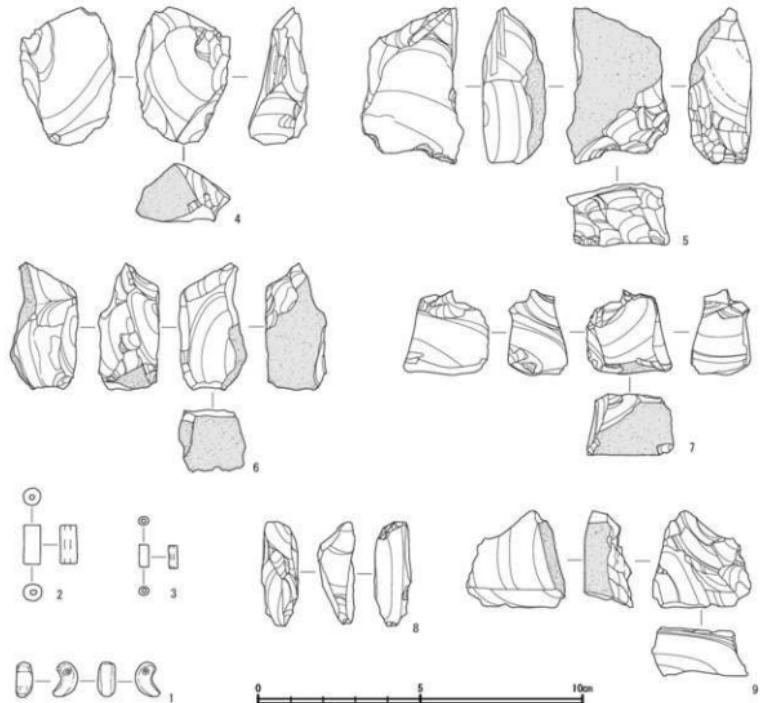
3 玉類・玉作り関連遺物（第25図）

玉製品として勾玉1点と管玉2点がある。勾玉（第25図1）は白色部分が多い明るい緑色の翡翠で、長さ1.1cm、幅0.6cmと小さなもので、片面穿孔でその口の径は2mmにも満たない。重さは0.61gを測る。管玉は長さ1.2cm、径0.55cmのやや太めのもの（第25図2）と、長さ0.7cm、径が0.3cmの小さめのもの（第25図3）で、2点ともやや淡い緑色の緑色凝灰岩である。2点の大きさは異なるが、穿孔の径はいずれも0.1mm前後と同じ程度である。管玉はやや大きめのもの（第25図2）がSD06、小さめのもの（第25図3）が勾玉とともにSD06からの出土である。

玉製作過程で残された石核は確認されなかった。チップや剥片などが10点前後あるが、明確な加工痕を確認できなかったため、加工痕があるものや大きな石核の6点を図化した。このうち5点（第25図4・6～9）に加工痕は間接打撃による打点が、それぞれ1カ所確認された。図化した石核で最も大きなもの（第25図5）は自然面が大きく、緑色の色彩も良くないためか加工痕を確認できなかった。包含層出土が1点（第25図6）の他は、SE02（第25図7）とSP69（第25図4）から1点ずつ出土し、残る3点（第25図5・8・9）がSD06からの出土である。

玉作り関連遺物が出土しているが、少なくともこの調査区で玉製品を製作していたとは考えていよい。

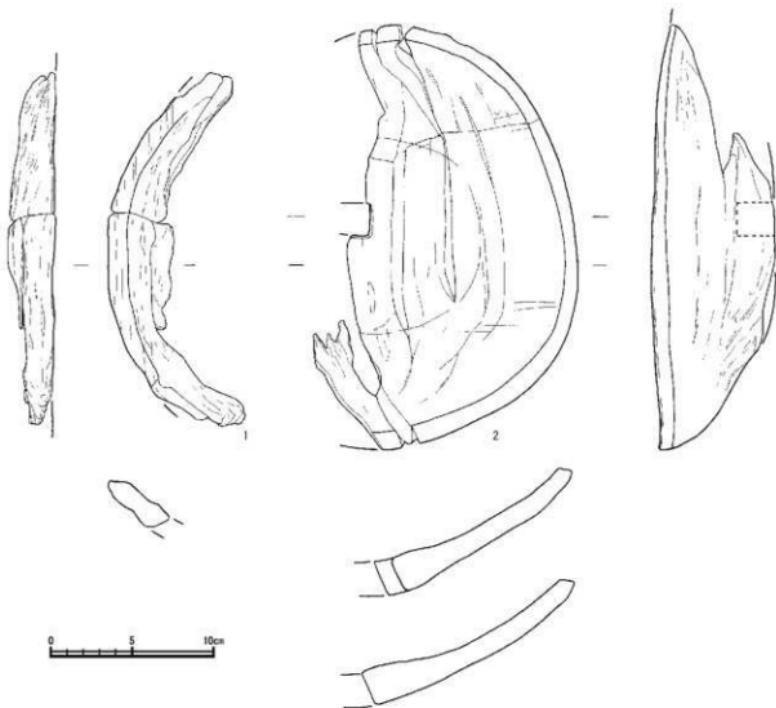
九頭竜川・足羽川水系を中心とする福井平野の弥生時代後期の集落であれば、この程度の数量の出土はよくあることである。特に弥生時代後期の玉作関連の集落は特定の遺跡縁辺部に集中する可能性が高い。



第25図 玉類・玉作り関連遺物実測図（縮尺2/3）

第3表 石器・石製品・玉作り関係遺物観察表

調査番号	目録番号	遺構/地質	石質	寸法(cm)				備考
				長さ	幅	厚さ	重さ	
第25図1	00006.00	岩相	10.40	7.10	3.10	411.0		
第25図2	00006.00	砂岩	7.70	7.20	3.60	616.0		
第25図3	00006.00	安山岩	7.60	2.80	3.50	107.5		
第25図4	00006.00	砂岩	8.60	6.90	6.20	613.0		
第25図5	00006.00	砂岩	13.30	9.20	5.70	1107.0		
第25図6	00006.00	花崗岩	7.10	6.60	6.30	6.61		
第25図7	00006.00	緑色墨灰岩	1.10	0.30	0.30	0.57		
第25図8	00006.00	緑色墨灰岩	0.70	0.30	0.25	0.08		
第25図9	00006.00	緑色墨灰岩	1.20	1.90	1.90	1.44		
第25図5	00006.00	緑色墨灰岩	4.80	3.10	1.90	26.15		
第25図6	00006.00	白雲母	(3.90)	(2.00)	(1.00)	17.74		
第25図7	00006.00	緑色墨灰岩	2.60	2.60	1.85	12.61		
第25図8	00006.00	緑色墨灰岩	(3.20)	(1.10)	(1.10)	6.02		
第25図9	00006.00	緑色墨灰岩	(3.90)	(2.00)	(1.00)	22.01		



第26図 木製品実測図（縮尺1/3）

4 木製品（第26図）

ここでは別々に図化したが、いずれもSE02から出土した同一個体の製品で、平面が円形を呈する木製品である。残存部分が大きいもの（第26図2）は半分ほどが残っていると考え、直径が26.1cmに復元できる。器高は8.8cm、厚みが2.3cmで、深さが6cm以上ある。底は明確な平底ではないが、直径12cmほどの円形に平坦な部分を作り出している。その中央に一辺2.1cmの方形と考えられる穴が穿たれている。縁は幅1cm弱の水平な平坦面を作りだしているが、製品そのものの遺存状況が良くないためか仕上げの調整などが不明瞭である。小さな破片（第26図1）も縁部分と考えられ、前者以上に残りが悪く全体に年輪部分が筋状に見える。復元される直径は第26図2より大きくなるが、歪みが大きいと判断して同一のものと考えている。遺存状態が悪いため判別しづらいが、本例に近い形状として、坂井兵庫遺跡群（下兵庫L地区SE-02）から出土しており、本例も釣瓶の可能性が考えられる。なお、木製の高杯の可能性も否めない。

第4章　まとめ

SE01とSE02から弥生時代後期、隣接する石川県での法仏式に相当する土器（第12・13図）が出土した。ここではその概要について述べておきたい。

SE01からは甕口縁と底部、壺の口縁と胴部が出土している。甕は擬回線文はないが有段口縁で立ち上がりが直立するもの（第12図1）である。底部はいずれもなんとか自立が可能と思われる平底（第12図2・3）である。壺の口縁（第12図4）は頸部から上だけであるが、おそらく畿内の長型壺の影響を受けた長胴となる縦長の壺であろう。壺の胴部（第12図5）には3段の円形竹管列の間に羽状の刺突を加え、最下段に円形竹管のある円形浮文を貼り付ける。

SE02から出土している擬回線文の有段口縁甕4点の口縁はほぼ直立するもので、そのうち3点に擬回線文が施文され、2点（第13図4・5）は摩滅しているが本来は明確な施文で、もう1点（第13図2）はハケ状工具によるものである。擬回線が施文されない無文の口縁部（第13図12）の立ち上がりもほぼ直立する。擬回線が施文されるもの（第13図14）と無文（第13図13）の大きく外反する有段口縁もあるが、この時期以降の土器に伴うことは確認されていないので、有段口縁出現期のバリエーションがこの時期まで残ったものと判断し、この時期で消滅すると考えられる。在地の甕として問題となるのが古墳時代初頭に甕の主体となる「く」字甕である。口縁の形状に特徴がなく個体差が大きいのでこれまで時期の指標としては避けがちな存在である。この時期の頸部は古墳時代まで下るものと比較すると、屈曲箇所が明瞭な角度のある「く」の字ではなく丸い屈曲（第13図6・7）が特徴と考えられ、口縁端部もそのあとにつながる摘まみ上げや面取りなどが定着していない。しかし「く」の字甕が甕組成の一定量を占めることは無視できない。また甕において注目されるのが近江系の影響と考えられる受口状口縁である。文様（第13図9・10）なども近江系の特徴であるが、胎土や色調から近江からの搬入とは考えられず、数は少ないながらも近江以外、または在地で製作されたものと考えられる。またほぼ完形で出土した受口状口縁甕（第13図1）は口縁部にも胴部にも近江の特徴的な文様はないが、底部が僅かながら上底となっており、製作技法などの関連も想定される。

高坪は坏部の口縁帯が内面に幅を持って肥厚するもの（第12図10）で脚部を欠くが、同じくSE02から出土している脚端部（第12図13）が色調や胎土の状況から同一個体の可能性が高い。この想定が正しいとすると、円孔が脚部のこの低い位置にあるのは南越盆地、さらには若狭などの影響と考えられる。口縁部が外反する坏部の高坪（第12図7）や、幅広の口縁帶に多条の擬回線文があるもの（第12図8）、口縁帶の擬回線文の下に円形刺突列点を加えるもの（第12図9）など、若干古い様相を残すものがある。

この他にも鉢に受口状口縁のもの（第13図16）があり、単なる搬入や模倣とは考えられない。受口状口縁については美濃からの影響と考えられる大野盆地（大山遺跡や右近次郎西川遺跡など）とは別に、南越盆地を介しての関係が想定される。受口状口縁を主とする近江系土器の分布は、九頭竜川以北の坂井平野では極端に少なくなる。近江東部の伊吹山地に接する南越盆地では、弥生時代全般に渡っての様相は不明ながら、その影響はお互いに大きく、受口状口縁と有段口縁との折衷土器が南越盆地や湖北などで多く見ることができる（越前では見田京遺跡、近江では桜内遺跡や坂口遺跡など）。つまり徳光大島遺跡の受口状口縁は南越盆地に近い福井平野南東部に立地するからと考えられる。

このような特徴から法仏式に併行する時期でも前後に2分した場合の後半と考えられるが、その様相は近江とも深い関係が伺える南越盆地に近く、福井平野南東部の特徴を示すものと考えられる。

写 真 図 版



(1) 遺跡遠景（東上空より）



(2) 遺跡遠景（北西上空より）

図版第二
遺跡



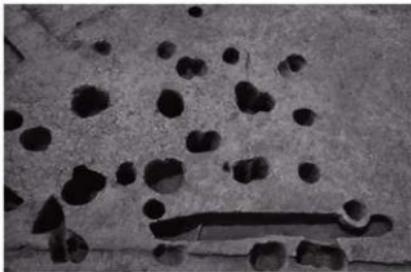
(1) 調査区南側全景（北西より）



(2) 調査区北側全景（東より）



(1) 調査区中央全景（北西より）



(2) SB01・SD03（北東より）



(3) SB02（西より）



(4) SD04・05・06（南東より）



(5) SD07・08（南東より）

図版第四
遺構



(1) SD06 遺物出土状況① (南西より)



(2) SD06 遺物出土状況② (南東より)



(3) SD06 遺物出土状況③ (南東より)



(4) SD06 遺物出土状況④ (南西より)



(5) SD06 遺物出土状況⑤ (南より)



(6) SD06 遺物出土状況⑥ (南より)



(7) SD06 遺物出土状況⑦ (南より)



(1) SE01 遺物出土状況（北西より）



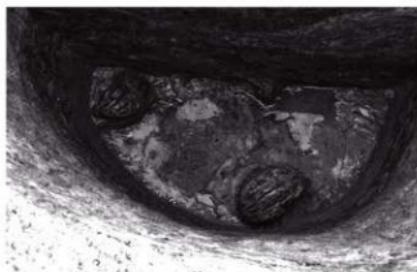
(2) SE01・SK02 (北東より)



(3) SE02 遺物出土状況①（北西より）



(4) SE02 遺物出土状況②（西より）



(5) SE02 遺物出土状況③（西より）



(6) SE02 下部半裁状況（西より）

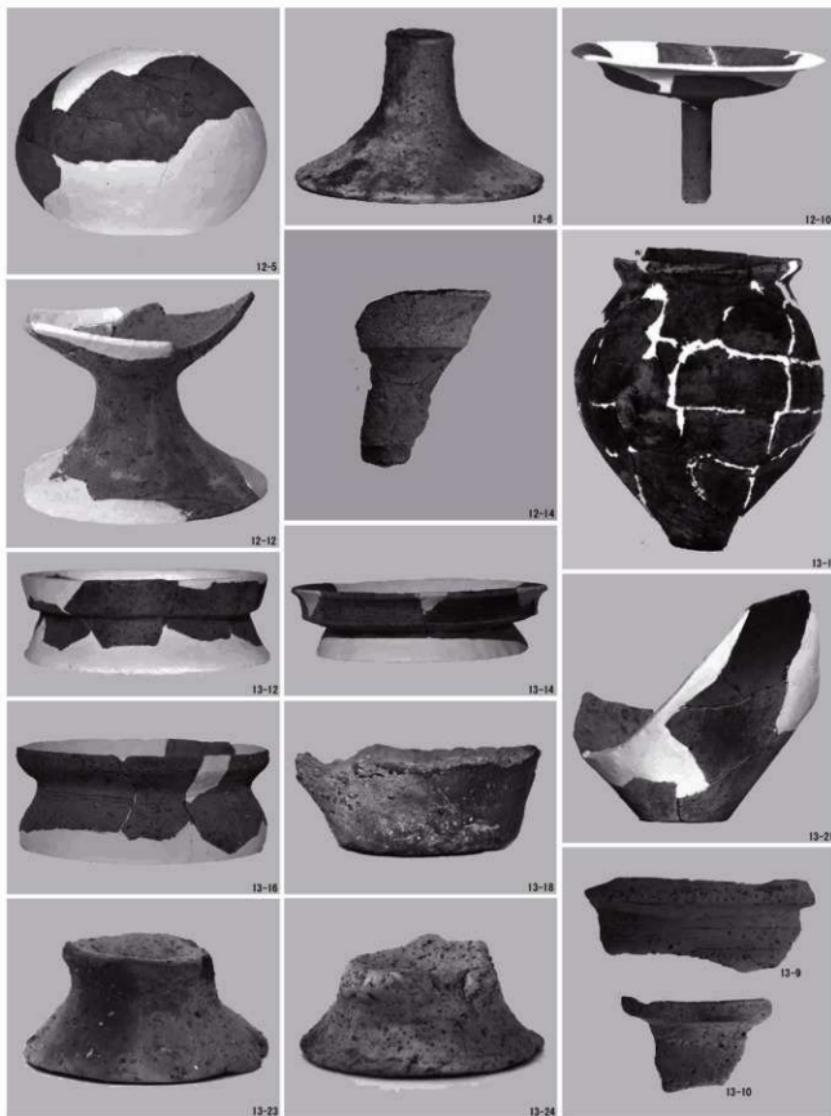


(7) SK03 遺物出土状況（北より）



(8) SK05 遺物出土状況（東より）

図版第六
遺物

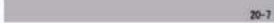
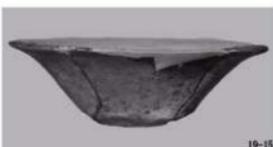
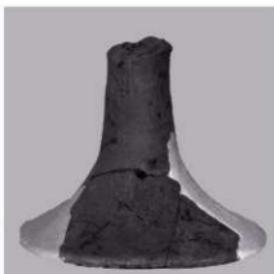


図版第七
遺物



図版第八
遺物





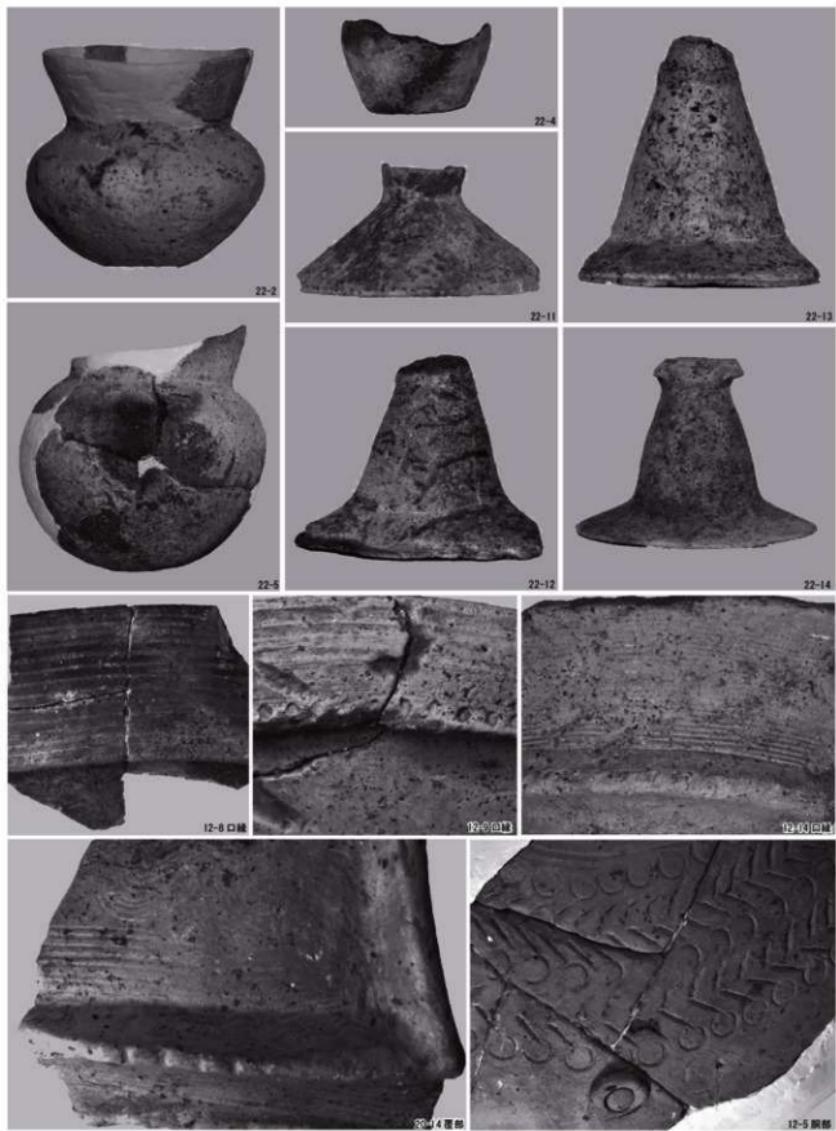
20-13

20-27

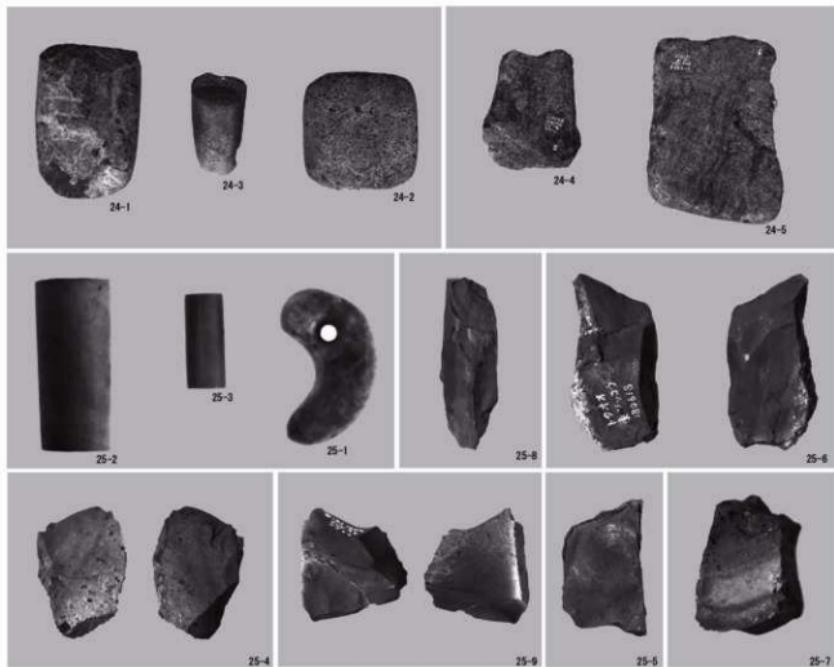
20-28



図版第一一 遺物



図版第一二 遺物



石器・石製品・玉作り関連遺物



木製品

報告書抄録

ふりがな	とくみつおおしまいせき						
書名	徳光大島遺跡						
副書名	一般県道徳光福井線道路改良工事に伴う調査1						
卷次							
シリーズ名	福井県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	182						
編著者名	青木隆佳(編) 田中勝之 魚津知克 赤澤徳明						
編集機関	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒 918-8226 福井県福井市大畑町 97-21-3 TEL 0776-53-7977 E-mail maibun-c@pref.fukui.lg.jp						
発刊年月日	西暦 2023年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 。' " 東經 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
とくみつおおしまいせき 徳光大島遺跡	ふくいけん 福井県 ふくいし 福井市 とくみつちょう 徳光町	18201 01329	36° 00' 28"	136° 14' 32"	20180601 ～ 20181031	1,460 m ²	記録保存調査
所収遺跡名	種別 主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
徳光大島遺跡	集落 弥生時代後期～古墳時代初頭 中世	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	古式土師器 玉作関係遺物 木製品 土師質土器				
要約	徳光大島遺跡は、江端川右岸の自然堤防上に立地し、主に弥生時代後期～古墳時代初頭に営まれた集落遺跡である。遺構は、掘立柱建物や井戸が調査区中央の微高地、溝が調査区南端の旧河道北側でまとまって検出した。調査区の中央が居住域、南側が集落の縁辺部にあたると考えられる。また、特にSD06では、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が一括して廃棄された状況で多量に出土した。在地系の土器群が主体だが、東海系の土器の他に翡翠製の勾玉や緑色凝灰岩製の管玉が共伴しており、地域間の交流等を推察できる良好な事例が得られたと考えられる。						

福井県埋蔵文化財調査報告 第182集

徳光大島遺跡

—一般県道徳光福井線道路改良工事に伴う調査1—

令和5年3月1日 印刷

令和5年3月10日 発行

発行 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒918-8226 福井市大畑町97-21-3

印刷 足羽印刷株式会社

〒918-8231 福井市問屋町3丁目212
